

(第二) 潜水艦

米	一一八	七七、三四九	一、〇〇〇	一三二	一〇〇、〇九七	一、〇〇〇
英	六五	五七、〇五八	〇・七四	七四	六〇、三一八	〇・六〇
日	四四	三四、〇八四	〇・四四	七二	七五、九三〇	〇・七六

之に反して各國の補助艦建造計畫は如何？ 乞ふ左の略述を讀め、

(一) 英國、統一黨内閣の下に十ヶ年間に五十二隻の大巡洋艦建造の計畫を樹て、一九二四—五年度分として既に五隻を起工し、次で翌一九二五—六年度分としては、大正十四年十月より巡洋艦二隻の建造に着手し、翌年二月更に二隻を起工し、其後は毎年三隻を建造すべく、又一九二六—七年度よりは毎年驅逐艦九隻、潜水艦六隻と其他の補助艦若干隻を建造することに決定した。茲に注意すべきは近時英國政界に於ける労働黨頭の結果海軍豫算削減の叫び頗る高きが如きも、國防上に積極主義を標榜する統一黨は依然として頗る優勢で、議會に於ける三分の二以上の議席を占めて居るから、充分なる海軍豫算の削減を許さない。道敎の事情は英國に於ける一部の所論を見て、直に軍縮熱

が全英國を風靡しつつあるかの如く速断する論者の注意を要すべき點である。

(二) 米國、一萬噸級巡洋艦二十二隻、雷導驅逐艦十隻、潜水艦三六隻を今後數年間に建造せんとする米國は、内八隻の巡洋艦、二隻の潜水艦だけは千九百二十四年十二月に議會の協賛を得、二隻の巡洋艦のみは既に起工された。米國が太平洋に於ける大規模の海軍大演習を行った目的の一は國民をして此補助艦と防備完成の必要とを理解せしめんとするにあるから、前記二十二隻の大型巡洋艦、驅逐艦、潜水艦の完成に向て其歩を進むるは火を踏るよりも明かである。米國に於ける海軍豫算の編成は我國の繼續年度式と異り、毎年々々新たに要求するものであるから、必要なれば一躍して大規模の造艦計畫を樹つることが出来る。

(三) 佛國、財政の窮乏に苦みつゝある佛國も亦千九百二十二年に於ける第一期計畫として、八千噸級巡洋艦三隻、驅逐艦十八隻、潜水艦二十一隻の建造を始め、更に翌二十三年度第二期計畫としては、一萬噸級巡洋艦六隻、驅逐艦三十九隻、潜水艦三十隻の建造計畫を議會に提出し、内巡洋艦二隻、驅逐艦六隻、潜水艦二隻は協賛を経て既に起工に着手した。

(四) 伊國、東部地中海の海權を制せんとする伊國も亦財政の窮乏を意とせず、一萬噸級巡洋艦二隻、驅逐艦十八隻、潜水艦四隻を建造中であるが、其他議會の協賛を経て建造豫定のものに巡洋艦三隻、驅逐艦、潜水艦各々十六隻がある。

(五) 日本、大正十二年より同十七年度迄に巡洋艦八隻（一萬噸級四隻、七千百噸級四隻）、一等驅逐艦二十四隻、潜水艦二十二隻（大型四隻、中型十八隻）を建造せんとして、日々其歩を進めつゝある。而して大正十九年度迄に艦齡第三期（巡洋艦十六年以上、驅逐艦、潜水艦十二年以上）に入る補助艦の代換としては、海軍當局は別に大正十一年度より五ヶ年計畫を以て、一萬噸級巡洋艦四隻、一等驅逐艦二十隻、大型潜水艦十隻を建造せんとする意圖である。

見るべし、華府會議後列國は一として補助艦の既定計畫を縮小又は廢棄せず、否却て之を擴張しつゝあるのに、日本のみは既定計畫を縮小して漸く上記の者に満足し、主力艦の六割比率に於て既に著しく國防上の缺陷を來して居る以上に、更に補助艦も亦六割比率に近きものを以て満足せんとす

るのである。然るにバ氏は斯る真相を知りつゝも尙且虚偽の計算を試みて世人を瞞着し、以て日本を誣ひんとするのである。これ日本國民が活眼を開て事物の真相を看破するの必要なる所以である。

然るに實際に於ては此補助艦競争の先驅者は日本にあらずしてバイウオーター自身の英國であるのは頗る奇怪である。嚮に英國の統一黨内閣が十ヶ年間に五十二隻の大巡洋艦と之に伴ふ多數の驅逐艦潜水艦等の尠大なる新計畫を樹て、内巡洋艦六隻潜水艦二隻は千九百二十五——六年度分として起工することゝなるや、米國は英國と同等主義の下に直に大型巡洋艦八隻潜水艦二隻の建造協賛を得、既に起工に着手した。然るに大正十四年七月に至り英國は更に千九百二十六——三〇年度分として巡洋艦十二隻、驅逐艦二十七隻潜水艦二十四隻の建造協賛を得たので、米國は更に之に對抗すべく新たな計畫を樹てざるを得ない。恰もよし議會は同年冬を以て開かるゝので、米國海軍當局は既に案を具して其日の來るを俟ちつ

ある。然るに此英米二國の補助艦計畫を我日本のものと比較するに、我に於ては到底論ずるに足らざる程小規模のものである。されは補助艦の建造競争は英國之を指導し、其波は米國は素より佛伊等の諸國にも及び、茲に一大波瀾を起しつゝあるのが真相で、斷じて日本の挑發になるものではない。バ氏が這般の真相を巧みに隠蔽して罪を日本に嫁せんとする所、寧ろ其心事の陋劣を憐まざるを得ない。若し米人の腹の中を割りて云はんか、米國海軍當局の眼中には小なる日本はない。彼等は只だこれ英國に劣らざらんことを期しつゝ、其真相を蔽はんが爲に顧みて他を云ひ、以て日本の補助艦勢力を引出物に出すのである。然り日本國民は斯る宣傳に迷はざるゝことなく、事の真相を看破して之に對勢すべく怠つてはならぬ。若し然らずして斯る中傷論を鵜呑みにし、輕々に外國人の非難に共鳴する如きあらば、これ實に言語同斷の非愛國的國民である。

次にバ氏は日本海軍の士官と兵員數の比例に就ても故意に其數を捏造

し以て日本を誣ひて居る。即ち彼は日本海軍の常備員を士官七千五百、下士官、兵七萬人とし、其比を下士官、兵九人に對して士官一人であるのに、米國海軍にては此比が僅に十七人に對して一人であると云つて居る。華府會議の結果、日英米三國人員の淘汰數を見るに、米國は士官、下士卒合計二萬七百を減じて九萬二千三百五十となり、英國は同二萬を減じて九萬八千五百となり、日本は一萬二千を減じて七萬二千となつて居るから、バ氏の擧げた日本の七萬七千五百の數字は過大である。士官と下士卒の比の如きも實際に於ては士官一人に對し下士卒約十五人の比で、其如何に日本海軍の士官の數を過大に捏造したかは一目瞭然である。想ふにこれ米國海軍は常に人員の缺乏に苦みつゝあるを以て、米國民に對して警告を與へんが爲めに殊更に虚偽の筆を揮つたものであらう、迷惑なのは日本のみである。若しそれバ氏が日本海軍軍人の素質は、國內に於ける反軍事主義が擴まつた爲めに低下せりとの一語は正に肯綮を穿つたもの、吾人は之を中傷的とし

て排拒し去らんよりも寧ろ他山の石として國民と共に自ら戒めんとする者である。

然らば米國海軍に對するバ氏の觀察は如何？。氏の筆は日本を誣ふるに急なる反對に米國に對しては頗る同情を表し寧ろ不公平なる筆を弄して居る。

由來米國海軍は其有する巡洋艦の數に於て甚だしく不足せる一方には世界大戰中の要求に基き多數の驅逐艦を建造したので驅逐艦に於ては世界に著しく其頭角を抜き爲に等齊を缺ぐ所の不具的艦隊となつて居る。勿論巡洋艦の不足を驅逐艦を以て補はんとするの不合理なるは明かなるもバ氏も米驅の海軍論者等も日米補助艦の勢力を比較する時には常にこの頗る優勢なる米國逐艦の勢力を揃に上げ知らぬ顔の半兵衛面にて巡洋艦の劣勢のみを高調し以て日本を誣ふるを慣用手段とした。而してこの慣用手段が茲にも亦假面を蒙つて其鋒銜を現はして居るのは注意すべき

點であらう。米國海軍が巡洋艦の數に於て不足せる結果不具の艦隊たるは吾人素より之を容認するに吝ならざるも公平なる見地を以て日本に必要なる補助艦勢力を算するならば日本としては純然たる防禦的戰爭の場合を豫想し一には主力艦六割比率の缺陷を補ひ二には戰時に於て我に絶對的必要なる海外との主要交通線を確保し以て我國民生活と物資の供給を安全ならしむるには少くも米國と同等の補助艦勢力を必要とするは少しく兵理を解する者の容易に首肯し得る所である。然も彼等は此の見易き眞理の前に自ら其眼を掩ふて日本の野心を云爲せんとするのである。

米國海軍が人員の缺乏に苦みつゝあるも亦事實である。然も艦船兵器が死物にして之を運用する者が人に在る以上其重大なる缺陷たるは云ふ迄も無い。五五三の比率を保持せんが爲め米國に幾許の海軍軍人を要するやは人により其意見を異にし或は九萬六千人を要すと云ひ或は十二萬以上を必要とすと論じつゝある。米國は九萬二千の人員を以てするも尙

多數の軍艦は人員不足の爲め、缺員のまゝに運用せられ、又は豫備艦として残留せられて居るから、戦争勃發して數十萬の人員を必要とする突然の動員の際如何に混亂状態を呈すべきやは想像に難くない。米國海軍當局茲に見る所あり、バ氏の短期服役法改正と共に、此の人員の缺乏より來る結果の恐るべきを普く國民に知らしめんが爲め、機會ある毎に宣傳に努めつゝ、ある處に宜なりと謂はねばならぬ。(拙著日米戦争日本は負けない参照)

七

バ氏の畫ける日米戦争は開戦一ヶ月後に比島とグワムを日本軍の手中に歸せしめた。これ素より當然の歸結で、苟も兵を知れる者は斯る結果の必ずしも小説的にあらざるを首肯するであらう。茲に於てか日本は其作戰目的(比島とグワムの占領)を達し、茲に第一期の作戰を終つて正に第二期の作戰に入らんとする、果して然らば此の第二期作戰に於ける日米兩

國の作戰方針は如何?。以下バ氏の戦況を批判するに先ち、先づ之を左に論じて見よう。

日米兩國は相互に距つる距離の長遠と、適當なる位地に海軍根據地を有せざる結果、其艦隊は各々敵を求めて主力の決戦を爲すを得ない。然るに日本は嚮に戦争の目的を論ずるに當りて指摘したるが如く、己の位置を不可侵ならしめて極東に於ける其優越なる地位を確保し、依て以て制限的戦争に於ける政略上の目的を達成するを以て満足せんも、米國は此日本の勝利に屈從せざる限り更に新たなる作戰方針に出づるや無論である。茲に於てか大に大造艦計畫を起し、少くも日本の海軍力に二倍乃至二倍半の優勢なる勢力に達したる時、捲土重來の勢を以て來攻することゝならう。

米國の優大なる資力は素より之を爲すことを得よう。然も日本も亦之に對應し、露支兩國の富源は素より、遠くは歐洲方面よりも造艦と兵資に必要なる材料を購入するを以て、米國の海軍力が日本の二倍乃至は二倍半に

達する迄には相當の時日を要する物と見ねばならぬ。米國例へ之を爲し得たりとするも、更に日本の手中にありて益々防備を嚴にせる太平洋諸島より日本艦隊を驅逐し、眞に日本の近海に殺倒せんには更に一層の長年月を要する事とならう。米國の政治協會が獨の亞細亞艦隊司令長官ストラウス提督や諸名士の集合席上に討議した結論に依れば、之には少くも二ヶ年の日子を要すると宣言して居る。茲に二ヶ年とは米國に有利に打算し日本の優良なる地理的狀態、封鎖の困難、乃至は將卒の素質等を問題外に置ける物であるから、米國の對日作戰が尙一層困難なるは察するに難くない。果して然らば日米戰爭は一種の弊疲戰と化すべく、之を彌へして日米兩國の何れか、最後の勝利を收めんとならは他に其方策を講ぜねばならぬ。此の方策とは他なし、經濟的疲憊、又は第三國を戰爭に参加せしむること、に依て戰爭を終結せんとし、外交戰に依て第三國を己の與國となし、依て以て相手國の弱點を衝くにある。即ち茲に少くも英露支並に墨國が此の外

交的爭奪の焦點となるのである。詳言すれば此の四ヶ國の中成るべく多數の數國を與國となし得たるもの最後の勝利者たるべく、然も此の爭奪戰には爾他の諸國も互に利害關係を有するを以て、世界は巴屯の形となり紛然又糾然稍もすれば第二の世界大戰を再びするの憂ひがある。然も斯るは之を日本側より見れば寧ろ有利であらう。

斯の如く第二期作戰に於ては、日米兩國各々大規模の造艦計畫に惱殺され、各々他に後れざらんことをこれ努むると共に、猛烈なる外交戰に入るは之を豫想するに難くないが、さればとて此間兩國の海軍は太平洋を隔て、只だ無爲の睨み合ひを爲すものでない、否荷も爾後の作戰に有利なる準備的作業は之を斷行するものと覺悟せねばならぬ。此の準備作業とは何ぞ、即ち(一)彼我の海上貿易に打撃を與へんが爲め、潜水艦、航空機、假裝巡洋艦等を貿易路の焦點に策動せしむること、(二)沿岸の砲撃、爆撃、特に造船所、軍器製造工場等に對する空中よりの爆撃攻撃等がそれであらふ。

バ氏は第二期作戦の初頭に於ける日米兩國の對勢を論じ、此兩國の何れもが已れより先に手出して主力艦隊の決戦を敢てするの不可能なるを説ける所は寔に妥當である。開戦後日米兩國相互間の貿易が杜絶すべきは勿論の事なるも、日本の對米貿易の杜絶と共に米國の對支貿易も亦甚大な打撃を受け、茲に本書の指摘するが如く米國內の非戦論者に有力なる後援を與ふることなしとも限らない。されば日本としては之を利用するに敏なるを必要とするも、さればとて斯る結果を過大視するは危険である。

此の海上貿易の妨害と破壊に關聯して當然起るべきものは、潜水艦を如何に此目的に使用するかの極めて興味ある問題であらふ。前説せるが如く華府會議の約定した潜水艦の使用制限に關する條約は佛國が批准を拒める爲め一片の白紙と化し去つて居る。去れば將來の戦争に於ては必ずや潜水艦が此目的に向つて使用さるゝを豫期し得べく、從てバ氏の畫ける如き種々の場合が現出し來るは之を豫想し得るのである。併しながら茲

に吾人が確言し得るは、日本の潜水艦長は如何なる場合に於ても商船に對する非人道的行爲を敢てせず、否却て氣侠的態度に出で、日本人の面目を躍如たらしむるの一事である。獨の世界大戦中獨逸の不法なる潜水艦戦は全世界の嫌惡を買つたが、それにも拘らず、茲に萬綠叢中の紅一點とも云ふべく、聯合國の海軍士官等が平和の日に喜んで之と握手せん事を欲した一人があつた、これ即ち獨逸のU五十三號艦長ハンス・ローズ其人である。彼の行動方法是一種獨特で、他の潜水艦長等は多少緩慢なる風にて商船を攻撃するも、茲に一潜水艦あり、突如として出現し、迅雷耳を掩ふに追なき攻撃に次ぐに攻撃を以てし、魚雷に次ぐに魚雷を以てし、立所に四五隻を雷沈し、終るや又突如として其姿を没する、これ即ちハンス・ローズの遣り方である。然も彼は其同僚の多くが爲すを敢てせざる事を敢行し、就中禮節を以て此の必死的競技を演ずるのである。即ち時としては彼は一船を雷撃するや、生存者が總て救助艇に移乗する迄附近に待合せ、曳索を投じて之を曳

航し、生存者に食物を與へ、敵驅逐艦の姿が水平線上に現はるゝ迄之を持続し、然る後曳索を放ちて海中に潜入する。勿論此仁慈的行爲は艦長ローズにとり甚だ危険で、苟も彼の附近に敵驅逐艦あらば事甚だ重大なるも、彼は之を知りつゝも尙周到の注意を以て此必死的行爲を敢てするのである。嘗て米國驅逐艦ヂャコブ・デヨンスを雷沈した時にも、偶ま該驅逐艦の無線電信機艦と共に沈没し、生存者は通信の方法を有せざるを見るや、ローズは非常なる危険を冒しつゝ、SOSの救助信號を發信し、且該艦の經緯度を電報して、乗員を載せたる端舟が洋上に漂流しつゝあることを英米艦隊の根據地たるクインスタウンに通知したのである。斯の如きは日本人の仁侠的勇敢心と非常に克く似通へるもので、日本に對し如何に毒筆を揮はんとするバ氏も此點を認めたのは彼にも亦一片の良心あるを示したものであらふ。余は確信す、日本の潜水艦長には百のハンス・ローズあることを。唯だ茲に吾人が我國民に對して警告せんとするは、中立國の港灣及其領

海内に在る敵國の商船並びに中立國旗を掲げたる敵船、乃至は敵貨殊に戰時禁制品を運搬する中立船に對する臨檢、搜索、拿捕等の處置が、甚だ複雑にして微妙なる問題を惹起し、稍もすれば日本の立場を不利ならしむるが如き場合なからしめんが爲め、事前の策を講ずるにある。バ氏が本章に掲げた日本が支那の領海内に在る米國の商船を拿捕して日支の關係を險惡ならしめたとの記事の如き、其深意は日支の關係を疎隔せしむるにありとするも、之を日本側より云へば必ずしも輕々に看過し得べき問題で無ひ。況んや日米戰爭の場合には英國は米國に對して好意的中立を採るものと信ぜらるゝに於ては、斯る通商破壊上の問題が日英の關係を險惡ならしむるの恐れがある。これ我國國際法學者は素より海軍當局者等が緊禪一番を要する點であらふ。

次にバ氏は日本に對する露支兩國の關係險惡なるの結果、日本の讓歩を豫示して居る。米國が其兵力を以て正面より日本を屈すること不可能なる以上、此等諸國民を煽動して日本に敵對せしめ、依て以て背後より日本を衝かんとするの計畫を巧みに説明したものであるのは讀者が看破せねばならぬ要點である。

米國が此目的に向ひ如何なる策略を用ふるかを知らんが爲め、有名なる極東通にして、舊の華府會議は素より、巴里會議の際にも支那側の外交顧問たりし米人トーマス・ミラードが、近著『亞細亞に於ける各國政策の衝突』(Conflict of Policies in Asia)中に發表せるもので、華府會議の直前米國當局に建言した秘密の覺書中にある一節を左に紹介しよう。

彼は華府會議は、日本の發展膨脹を適當なる範圍内に制限し、其帝國主義的慾望を抑制し、且其極東に於ける勢力を合理的の距離内に縮め、依て以て支那に於ける列國の政策を米國に有利なる様に開展せしむるに絶好の機

會なりとし、此方針を以て會議に臨むべきこと、並に日米戦争の場合に最も必要なるものは露、支、及朝鮮人の態度であるから、之をして日本に敵對せしめて背後より日本を衝かしめ、且日本に對する物資の供給を杜絶せしむる様、左の諸手段を採るべしと勸告して居る。

- (一) 平時に於ては露、支、朝鮮と米國との間に密接なる關係を作る様、極東に於ける米國の外交官並に通信事業に従事する人物を増し、以て此等諸國民の感情、政治上の傾向、組織並に企圖を充分に知悉せしめ、且之が爲に莫大な經費を準備すること。
- (二) 戦時(日米戦争)に於ては此等の諸國をして日本に敵對して干戈を執らしめんが爲め、之に武器彈藥金錢及陸海軍の顧問を供給し、又此等の諸國をして日本に對し真正中立を宣言せしめ、日本が勢ひ鐵道、鑛山、其他の物資を獨占せんとして中立を侵犯するを俟て、獨逸の白耳義勇隊の例に倣ひ、此等諸國をして公然日本に敵對せしむる如き手段を講ずること。

- (三) 平戰兩時を通じ、英支兩語を以て電報通信、パンフレット、新聞雜誌等有ゆる方法を用ひてプロパガンダを行ひ、日本に對し此等諸國を離間せしむること。

(四) 物資の買収及運搬を掌らしむべき一國を組織し、主として露支兩國よりの物資の日本に入るを防ぎ、且日本の海外との貿易を杜絶せしむるに任ぜしむること。戦争の初期に於ては武力を以て日本に之を強制すること困難なるを以て、斯る場合には中立人及露支兩國の商人と結託して、物資を買収せしむるを可とす。

之を読むもの誰か正義人道を看板ととする米人の魔手が、平和の今日に於てさへ既に那邊に迄及びつゝあるかに驚愕せざるものは無らふ。日米戦争は實に單一なる日米間の戦争のみに非ずして、各々之に直接の利害關係を有する諸國間の巴戟戦である。我當局者並に我國民は豫め之に處するの覺悟と準備あるか、吾人は我國民が輕々にバ氏の所説を讀過し去らざらんことを熱望する者である。

遮莫バ氏の筆は一言英國の態度に言及せず、將又米國に不利なる墨國や南米諸那の状態に言及して居ない。日米相戦はしめて最大の收獲を得るものは疑もなく英國である。バ氏は巧みに其瓜牙を隠したるか、將又墨國

や南米諸邦を日米戦争の舞臺に入るゝは、此等諸國民を覺醒せしめて却て米國に不利なる結果を來すと考へたるか、何れにするもバ氏の筆が常に排日てふ主義一貫せる筆路を辿れるは世界の爲め惜むべきことである。

バ氏は又米國との戦争の結果日本の經濟界が甚大の打撃を受けたる如く述べて居る。日米戦争の場合他給他足の國たる日本が物資の缺乏に苦む可は之を豫想し得るも、露支兩國並に歐洲方面との交通線が日本海軍の手により確保せらるゝ以上、此物資の缺乏も必ずしも然く悲觀するに足らざるは識者の認むる所である。此點に關してはバ氏の筆は日本の戦敗を豫想せしめんが爲め特に過大に書かれて居る。只だ茲に明諒なる一事は物價の騰貴は之を免るゝを得ないから、之に處するの途を攻究して置かねばならぬ。若しそれバ氏が日本商人の缺點たる不徳義なる暴利心を指摘せる一條に至ては正に肺腑を衝けるもの、須らく國民相互に戒むべき點であらふ。(拙著日米戦争日本は負けない参照)

バ氏の書いた米國太平洋沿岸に對する日本潜水艦飛行機の活動は頗る巧妙であるので、一部の論者は之を以て架空的小説なりとして非難する者がある。併しながら太平洋は廣く、潜水艦の行動半徑は益々増大の趨勢にあるから、之を以て不可能なりとして一笑に付し去るは寧ろ無益であらふ。唯だ此等日本の奇襲艦艇並に飛行機の活動に對して、布哇の米國艦隊が何等爲す所なきは不可解である。若し此布哇の米國艦隊にして日本軍の退路を遮斷せんとして適當の配備を取るならば、博多や劍崎が無事横須賀へ歸還し得たかは疑問とならふ。

バ氏は又米國海軍の高官中に、日米戦争が速に終結すべしと樂觀して、造艦計畫の一部を差控へたと説くも、斯の如きは殆んど想像に苦む所である。斯る意見は兵理を知らざる米國民の一部には抱懐さるゝことあらんも、之

が爲め海軍當局の意見を動かし得るとは信ずるを得ない。想ふにバ氏の深意は、兵理の何物たるを知らざる此種の論者を覺醒せしむる爲の用意周到なる筆致と見るのが正當であらふ。

況んや米國の造艦計畫が、日本の米國太平洋沿岸に對する飛行機の襲撃により刺戟せられて其歩を進むるに至つたとのバ氏の筆も緩慢である。日本を屈せんには優大なる海軍力を第一に必要とするは如何なる點より見ても明白で、斯る明瞭なる眞理を無視して、米國海軍當局が造艦計畫に緩慢なる歩を取ると説くが如きは痴人夢を説くに異らない。

一〇

バ氏のマゼラン海峡戦は、本書の所々に散見する、兵理を無視した架空的小説の一例で、米國海軍省が斯る無稽なる策を採らざるは自明である。實に米國の海軍當局が大西洋艦隊に成るべく最短航路を取らしめんとして、

敵の奇襲を受くべき機會最も大なるマゼラン海峡を通過せしむるとは信するを得ない。南米南端の地圖を一瞥する者は、フオー克蘭ド群島が南米大陸の東南端に在りて、マゼラン海峡は素より其最南端にあるレ・メーヤ海峡をも制するの位置にある事を觀取し得るであらふ。若し慎重なる米艦隊の司令長官ならしめば、彼は必ずや先づ此フオー克蘭ド群島に入りて敵情を偵察せしめ、萬全を期してレ・メーヤ海峡を通過するか、又は其東方に在るステーション島を迂回してホーン岬附近に出で、以て太平洋方面に出でんと試みるであらふ。フオー克蘭ド島は英領に屬し、糖の世界大戰中フオン・スパー提督の獨逸太平洋枝隊がコロネル沖に英艦隊を屠りたる後、這回は己の順番となりて、スタヂー提督の率ふる英艦隊の爲に全滅した所である。斯の如く該島は南米の南端附近を監視する要衝に在るを以て、英人は茲に多少の防備を施し、特にポート・ウキリヤムの如きは英艦隊の常泊地で、小規模ながらも諸般の施設を有して居る。思ふに米艦隊は日米戰爭

に好意的中立を表する英國の屬地フオー克蘭ド群島に立寄ることに依りて諸般の便宜を得べく、然るを自ら好んで危険の大なるマゼラン海峡を探み、智利の貧弱なる一港プンタ・アレナスに入港する必要は無ひのである。假りに一步を譲り、米國艦隊は或緊切の理由により、最短航路を取るの必要上、マゼラン海峡を撰擇せりとするも、艦隊が此海峡通過に必要とする敵情の偵察警戒配備等に至ては、何等重要な措置が講ぜられて居るのを發見するを得ない、唯一テ提督の取れるものは、此海峡通過に關し特別の訓令を與へ居るも、之とても普通の警戒航行以上に特別の措置が講ぜられて居るものとも思はれなむ。

バ氏は書中に米國艦隊が英國の好意的中立に依頼し、其海軍根據地や港灣を使用して、戦炭、給油、積糧通信等有ゆる便宜を享受するが如き場合を記載するを避けて居るが、此フオー克蘭ドの如きも其一例である。之をバ氏從來の所論より判斷するに、氏は極端なる排日家たると同時に、又極端な

る親米論者であるから、英國の好意的中立を記載するを避くる氏の深意が那邊にあるやは略ぼ之を察することが出来よう。

一一

マゼラン海峡戦に不合理なる戦況を畫ひたバ氏の筆は、更に小笠原島占領戦の不思議な計畫と戦況とを畫くことに依て愈々支離滅絶した。一言にして云へば、此の眞面目なる小笠原占領計畫の如きは兵術上より見て百害あつて一利なき無用の作戦である。

余は獨に第二期作戦の作戦方針を論ずるに當り、米國側としては出来得るだけの加速度を以て大造艦計畫の實行に努め、以て日本艦隊の少くも二倍乃至二倍半の優勢なる海軍力に達した時、決然起て攻勢に轉ずるの良策なるを述べ、此間猛烈なる外交戦に依て露支兩國を日本に敵せしめ、以て日本の背後を衝くべきを述べた。蓋し比島とグロムが日本軍の手中に歸し

た後の日本の西太平洋に於ける戰略的對勢は不可侵にして、此不可侵を覆へし得るものは、日本が豫期せざる背面より露支兩國の爲に攻撃せらるゝか、又は日本に少くも二倍又は二倍半の優勢なる海軍力を以て逐次に太平洋上の海軍根據地を占領奪回しつゝ、日本の主力艦隊に決戦を強ふるか、又は之を日本の港灣に封鎖するの外良策が無ひからである。

米國の外交家が露支兩國を己の與國となし得るか否かの問題は暫く措き、米國の主力艦隊にして眞に日本の主力艦隊に決戦を強ひんとするか、又は之を其港灣に封鎖せんとすれば、日本に對し艦隊の行動半徑たる二千哩圏の内部にある一又は數個の海軍根據地を占領せねばならぬ、但し之が爲に必要な條件は背後の連絡線が安全であることだ。然るに小笠原島の位置を見よ、該群島は日本々土とマリアン群島との中間に在るを以て、マリアン群島やグロムが日本軍の手中に在る以上、腹背敵に依て圍まるゝの形勢となり、之を占領せんとする米軍は自ら好んで日本軍の良中に飛込むも

のとなる。されば小笠原島の占領は先づ日本軍の手中に在る南洋群島を掃蕩占領したる後に於てのみ之を實施し得べく、然も此掃蕩占領には米國軍艦の幾隻かを犠牲とすべきを覺悟せねばならぬので、茲に日本艦隊に比し相當の優勢を持つる曉に於てのみ之を斷行し得るのである。

假りに一步を譲り米軍は大なる損害なしに小笠原島を占領し得たりとするも米艦隊の主力は之を根據として如何にして作戦せんとするか米國の艦隊司令長官は速に日本主力との決戦を望さんも機を見るに敏なる日軍の司令長官は斯る術策に陥る事なく地の利を利用し奇襲艦艇を用ひて米軍の勢力を滅殺するに努むるであらふ、然るに小笠原島の地勢は大艦隊の安全なる泊地たるに適せず之が補給に必要な設備も無く入渠修理の便も無ひ。されば小笠原島に在る米國艦隊は常に戦々競々として先づ自軍の保存に努めざる可らずして敵に弱點をのみ示すの結果は日本軍の乗ずる所となるは容易に首肯し得る所である。(拙著日米戦争日本は負け

ない参照)

之を要するに小笠原遠征を説くが如きは、兵戰の三大要素たる天(時)地人の中前二者を無視するもので、今は其時で無ひ。只だ之を米國內の無謀なる官進論者に警告せんとするバ氏の老婆心と見れば意味を爲すものであらふ。

一一一

余は既に前節に於て米軍の小笠原島占領計畫の兵術上より見て不合理なるを説ひたが、進んでバ氏の畫ひた此占領計畫の實施を見るに、始めより之を失敗に終らしめんとして無理なる配備や運動を敢てせしめた跡が歴々として之を指摘することが出来る。要するに本章畫く所の遠征軍の戦況は兵術眼を以てすれば其價值零である。

第一に指摘すべきは、此遠征の實施と關聯して米國の主力艦隊に如何な

る任務を與へ、如何に之を配備すべきやの問題である。パ氏は小笠原島の占領は一種の不可思議なる毒瓦斯の力に依頼し、徹頭徹尾日本軍に知られざる様艦隊並に運送船隊の行動を秘し、以て奇襲的占領を行はしめんとして居る。比島とグワムの陥落後南洋群島には嚴密なる日本軍の通信網が張られ、布哇方面に日本潜水艦飛行機等が晝夜を問はず監視の眼を見張りつゝありと想像せらるゝ時に於て、斯る大艦隊の移動が日本軍の偵知する所とならずと輕信するが如きは有り得べからざることである。果して然らば米軍は日本艦隊の逆撃を豫期して小笠原占領計畫を樹つることが最も緊要、且萬全の策であらふ。

既に敵艦隊の逆撃を豫期せば、運送船隊の掩護はドイル提督の直接掩護艦隊のみに委ねることなく、運送船隊の進路を安全にし、且敵襲に際せば直に之に來援し得る様、ダーリンガー提督麾下の主力艦隊を適切に配備することが最も肝要である。然るにパ氏の筆は此主力艦隊を小笠原島の東方

一千哩以上の洋上に置き、適時に運送船隊の掩護を不可能ならしめて居る。曰く、日本主力艦隊は米軍小笠原島を攻略せんとすと聞かば直に來援すべく、然も此主力艦隊が小笠原島に到着した時には該島は既に米軍の手中に落ち、其陸上砲臺は寧ろ日本艦隊に對して砲撃するであらふ。此日本主力艦隊が陸上砲臺と戦ひ、砲彈を消費した後、米國の主力艦隊現はれ來らば勝利は忽ち米軍に歸せんと。斯の如きは戦史の教訓と兵術の何物たるを知らざる生兵法者の稍もすれば陥り易き所で、敵が如何なる行動を採るべきかを一切眼中に置かず、唯だ自己に有利にのみ打算して、敵と兵火相交ふるに至り始めて其非を覺る者の爲す所と同一である。敢て問はん日本の優勢なる艦隊が米國主力艦隊の到着に先ち、先づ運送船隊や直接の掩護艦隊を撃滅し、米軍主力艦隊の出現以前に急に本國方面に引揚げ去らば如何、後れて到着せる米軍主力艦隊は何を爲さんとするか。然も斯の如きは必ずしも不可能でないとすれば、パ氏は正に獨相模をとりて自ら米軍の遠征を

失敗に歸せしめたものである。

第二に指摘すべきは運送船隊が暴風雨の爲め其二隻を喪ひ、多數の陸軍兵揚陸用諸材料並に軍需品を喪へる時に當り、ドイル提督が此行動を繼續せしは果して適切なりや否やの問題である。時にミラー隊との連絡は絶へ、ダーリング提督麾下の主力艦隊も、此の暴風雨の爲め果して豫定通りに航行しつゝありや頗る疑問とせらるゝ現状に於て、目標とする小笠原島へは尙少くも二百五十哩を餘すに於ては、寧ろ一旦ウエーキ島に引揚げて再擧を圖るを得策とする。邁進必ずしも成功の秘訣にあらず、要は友軍との連絡を保ちつゝ、思慮ある斷行に俟つ方成功の機會がある。然るにバ氏は前段にも説けるが如く、敵の兵術的手腕と兵力とを無視しつゝ、日本軍果して何をか爲し得んかの盲勇を以てドイル提督を盲進せしめた。之を一の架空的小説と見れば兎も角、苟も兵を知れる者より見れば斯の如きは一の兒戯に過ぎない。

一二二

小笠原の無暴なる遠征に失敗した米軍は、茲に作戰計畫を根本的に改めて、グワムと比島を奪回し、以て日本艦隊を撃滅せんが爲め、一方ダツチハーバーを根據地として日本軍を北方に牽制し、其虚に乗じトラツクを占領して米軍の根據地たらしめんとして居る。見るべし一の惡戯的筆致を弄して米軍の無謀なる小笠原遠征を書き、以て米國民に警告したバ氏の筆は、今や兵術の本義に復歸して稍々根據ある作戰方針に轉ぜんとしつゝあるを。併しながら米軍の作戰部が策定した如上の策の適否如何を評論せんには之に先ち、太平洋に於ける一般形勢、並に此形勢に應じて米國海軍の高級作戰部が如何なる作戰計畫を採らねばならぬかを述ぶるの必要がある。

開戦以來今や九閱月を経過して比島とグワムは完全に日本軍の手中に落ち、日本は其敵に奪回せらるゝを防がんが爲め、之れを金城鐵壁となし、又

日本の委任統治領たる南洋群島の重要な個所には之に防備を怠ぎ、其他
 厳密なる通信網を設定して、布哇方面に於ける米國艦隊の動靜は素より、苟
 も西太平洋に進出せんとする米國の艦隊は、夜間と雖日本哨艦の注視を逃
 れて通過する能はざらしむるに努むるであらふ。斯くて日本は露支兩國
 との交通線並に南西方面との交通線を安全に保持するに全力を注ぎつゝ、
 造艦造兵に要する材料は素より、必要なる物資の輸入に努め、以て長期の戦
 争に堪ふる準備を爲すと共に、敵に後れざらんが爲め開戦早々大造艦計畫
 を樹て着々として歩を進むるは素よりである。之に對して米國は其全艦
 隊を布哇に集中し、絶へず輕艦艇を放つて日本軍の動靜を偵知し、(バ氏の
 筆が一言此點に及ばざるは氏の海戰に關する智識の淺薄なるを疑はざる
 を得ない)、又輕艦艇、奇襲艦艇、其他假裝巡洋艦を放つて日本の海上貿易の阻
 害に努め、内には大造艦計畫を起して決然攻勢に轉ずるの準備を爲すであ
 らふ。此米國の造艦計畫はバ氏の説く所に依れば、開戦後二ヶ月の五月初

旬に於て巡洋艦四隻(噸數を示さざるも恐らく一萬噸級ならん)驅逐艦二
 十隻(千二百噸級?)潜水艦若干隻を起工し、六月末には更に巡洋艦四隻
 (五萬二千噸、三十五節、十八吋砲八門)巡洋艦二十五隻(一萬噸、八吋砲九門、二
 十八乃至三十五節)驅逐艦百隻(千二百噸級?)潜水艦五十隻(千七百噸)
 航空母艦六隻を、又同年十二月末には巡洋艦六隻(二萬二千噸)驅逐艦五十
 隻(千五百噸)潜水艦二十隻、航空母艦四隻を起工して居る。されば第三期
 作戦の初頭なる千九百三十二年二月初旬に於ては、米國の造艦現狀が順當
 に經過するものと見て、一萬噸級巡洋艦十六隻、大型驅逐艦百隻、大型潜水艦
 五十隻は新たに米國海軍の勢力を増加して居るものと見ることが出来る。
 然も一方日本も亦之に對抗して大規模の造艦に着手するが故に、假りに日
 本を不利に計算するも尙、米國の優勢は前記の三分の一、即ち巡洋艦に於て
 五隻、驅逐艦に於て三十隻、潜水艦に於て同十五隻位に過ぎざるものと思は
 れる。されば茲に千九百三十二年二月初旬に於ては、日米海軍力の比率

は開戦直前とさしたる大差なく、他方に於て日本は西太平洋に於ける其地歩を益々鞏固ならしむるを以て、結局に於ては開戦直前と同様か、又は寧ろ日本の方に有利なる結果となる。果して然らば此の二月の初旬に於ては米國海軍作戦部の企圖する日本に對する本攻撃は未だ其時機に適せるものと認むるを得ない。然らば米國艦隊が日本艦隊に比し其勢力少くも二倍又は二倍半となるは何時なるべきか。余は諸般の事情を考慮して開戦後二ヶ年以内には米國は到底斯る比率に達せずと認めて居る。

茲に於て更に一步を進めて、米國の海軍力が右の如く日本の二倍又は二倍半に達せる時、決然起て攻勢に轉せんが爲め如何なる作戦計畫を採るべきかを論じて見よう。

米國艦隊の作戦目的は疑もなく日本艦隊の撃滅に在りて、後者若し其港灣に避退せば之を封鎖して出撃を餘儀なくせしむるか、又は日露戦争に於ける旅順艦隊の如く、之を自滅せしむるにある。蓋し斯の如きは日本をして

速に和を乞はしむるの捷徑であるからだ。勿論米國艦隊は時としては日本の海外との交通を阻害して、或は日本の都市其他主要地點に向ひ攻撃を行ふことあらんも、此等は何れも最終の作戦目的を達せんが爲の手段に外らずして、作戦目的其物は戦争の始終を通じて變るものでない。

此最終の作戦目的たる日本艦隊の撃滅を企圖するに當り、日軍若し米軍の挑戦に應じて出撃し、茲に速に彼我主力艦隊の決戦を行ふを得ば問題なきも、日本の司令長官は先づ奇襲艦艇を放つて米軍の勢力を滅殺し、均勢略ぼ成るを待て出撃に轉するか、又は米軍の勢力を分割するが如き策動を行ひ、己の相對的優勢を以て敵を個々に撃破せんと努むべく、苟も機未だ熟せずと見なば本國港灣に退却し、有利なる地形を利用して更に好機の再來を待つものと思はるゝを以て、米軍にして眞に其作戦目的を達せんとせば、多くの場合先づ適當なる所に前進根據地を獲得することが必要となる。而して此目的に向てはグワムと比島の奪回が最も適當なるは前説せる如く

である。

茲に於て斯る場合に採るべき策を考究するに次の四策がある。

(一) 布哇又は桑港よりアリューシャン群島に近き大圏上の所謂北方航路を取りて日本の近海に殺到するもの。

(二) 布哇よりウエーキ島を経てグワム、比島に到る中央航路を取り、後の二島を奪回して日軍主力艦隊の出撃を俟機なくせしむるもの。

(三) (二)の目的を達せんが爲めヤルト、オナベ、トラック等の諸島を漸次に占領し、遂にグワム、比島に及ぼすもの。

(四) 布哇よりツツイヲを経てニューギニア附近の英國港灣に至り、之を根據として比島の奪回を企つるもの。

右の中(二)は距離最短なるも天候霧等の障害に遭ふこと多く、且附近に適當なる海軍根據地なきを以て、大艦隊の航路としては適切でない。唯だ北海道方面に策動せんとする小部隊の爲には之を利用することが出来る。

(二) は最良の航路なるもグワムと比島が既に日本軍の手中にある以上、此二島の奪回は然く容易ならざるべく、従て他に其方策を講ぜねばならぬ。

(三) は之が要求に應ずるものである。實に米軍にして日本の手中に在る南洋群島をじりくくと占領しつゝ之を踏石として遂にグワムを奪取するに於ては日本は非常なる苦痛を感ずることゝならふ。唯だグワムの地形は大艦隊の安全なる碇泊を許さないから、米軍にして眞に有效なる日本の封鎖又は其主力艦隊との決戦を企圖せんとすれば、比島をも奪回するの已むを得ざるに至るべく、事茲に至れば日本は已むを得ず最後の決戦を試みるの外は無ひ。

(四) は英國が米國に與みして起つか、又は其好意的中立を豫期し得る場合である。英國參戰の場合には問題外として、其好意的中立の態度を保持する場合に米國艦隊に其港灣の使用を許すが如きは重大なる中立違反たるや勿論なるも、近時の海上戦争に於ける交戦國と中立國との關係は頗る複雑

となり、稍もすれば中立國をして斯種の中立違反を辯護するの口實を得せしむるものである。例へば支那が中立を宣言せるにも拘らず、日本が其勢力範圍内に在る支那の一地方に對して、中立違反と非難せらるゝ如き或種の行動を爲せりと假定せよ、米國は之を口實として英國の港灣を戰爭用に使用することなしとも限らない。斯の如きは嚮の世界大戰中に頻々として起つた實例である。されば日本としては豫め斯る場合に處すべき對策を攻究し置くことは極めて肝要で、(四)の必ずしも一片の杞憂に非るを我國民が充分に知悉せんことを望んで止まない。

今左に米國海軍當局が這般の問題に關して如何なる意見を有するやを示さんが爲め、千九百二十四年二月十一日以後數日に亘り、メヤー島軍港司令官マクキーン海軍少將が、米國の下院海軍委員會に於て陳述したる要領を紹介しよう。彼は米國艦隊の東洋進出航路に就ては前記の(二)(三)を不可として、グワムと比律賓群島にして日本軍に奪取せられた曉には、米國艦

隊は布哇以西は『他の航路』を採らざる可らずと述べて居るも、この『他の航路』が如何なるものなるやは之を公表するを避けて居る。然るに一議員が、現狀に於ける米國艦隊の兵力及根據地の狀態より推して、首尾よく比律賓群島を防護し、依て以て東洋に於ける門戶開放主義を支持するを得るやと問へるに答へて、

「否！然しながら吾人は移動根據地を作り、之を艦隊に伴ふことが出来る。然らざれば一根據地を奪取することも亦可能である。唯だ遺憾なるは我艦隊が釣合採れざることである。即ち我艦隊が太平洋を横断して東洋に作戦し得る迄には時間を要するか、其間に敵は比島とグワムを奪取すべく、果して然らば米國艦隊は逐次根據地を占領し、進んで敵に決戦を強ふるの餘蘊なきに至るであらふ

と云つて居る。これ即ち前記の(三)を指したものと思はれる。

バ氏の畫ひた米國作戰部の作戰計畫は、アリュウシヤン群島のダツチハバーより北海道方面に一部の侵襲を試み、日本の海軍力を同方面に牽制

し置きながら、ツツイラよりトラックに向て本攻撃を試み、之を占領したる後、之を踏石として更にグワム又は比島又は此兩島を奪回し、以て日本主力艦隊をして決戦を餘儀なくせしめんとするにある。此計畫は大體に於て兵術の本義に合するも、先づヤルト、ボナつを占領し、日本の南洋群島より日本軍艦を掃蕩したる後に非んば餘りに危険である。或は此等の諸島を同時に占領するも可なるべく、要するにベ氏の筆は餘りに大膽過ぎるの嫌がある。嚮の世界大戰中英國海相チャーチル氏は北海に於ける獨逸のヘリゴランド島の強襲占領を主張したが、専門家は擧つて之を向ふ見ずの冒險として却けた。兎角實戰の經驗に乏しく、兵術の素養充分ならざる者は斯種の輕卒論を振り廻はしたが、傾あり、これ大に戒むべきことである。ベ氏は又支那が米露兩國の煽動により排日的態度を増長し、日本に對する物資の供給を拒絶しつゝあることを述べて居る。これ即ち前章に掲げた米人ミラードの策を借り來つたもので、斯種の隱謀が必ずや米人に依て

行はるべきは日本國民が豫期せねばならぬ所である。然も米人の背後に更に英人あるを豫期し得る時、日本の立場は更に一層の困難を増すであらう。知らず我政府當局者に這般の準備ありや、我國際法學者は此等の戰時禁制品問題に關して之に善處すべき方策ありや、抑も亦我國民の覺悟は如何。由來戰爭に於ては法理は稍もすれば其力を喪ひ、最後の斷案を下すものは力これ權利となり易き傾向がある。何となれば甲論は乙論を以て之を駁するを得べく、結局に於ては法理の如何は有耶無耶となるからだ。日本は素より國際公法を無視してはならぬ、然も此國際公法にして最後の斷案を下すべき充分の權威を有せずとせば、日本の主張を貫徹すべく背後の兵力を準備するはこれ亦已むを得ない。茲に至て日露支三國を緊密に結合せしむるの緊要と、戰時に至り第三國の隱謀を未萌に防ぎ、要すれば支那及極東露西亞の平和を確保せんが爲め、我兵力を以て此兩國を援助するの必要が明瞭となつて來るのである。彼の漫然として我陸軍縮小論を唱導

する者に果して遺般の先見と明ありや、これ大に吾人の疑問とする所である。

一四

バ氏の書いたロツモウ沖の海戦を見るに、本章に於ても亦氏の筆は兵術の本義を無視して頗る非實戰的なる幻映を畫いて居る。余は前章に於て米軍がトラツク島を占領せんとする此の千九百三十二年二月、三月の交に於ては米國海軍の戦備は未だ攻勢作戦を企圖するに足らざるを指摘したが、バ氏の筆は此の攻勢作戦の根柢となるべき米國海軍力の如何を無視して無理にも奇襲的占領を行はしめんとする兵術上の過誤を敢てして居る。抑も奇襲は兵術上に尊重すべき成功の秘訣なるも、今日の海上戦争は所謂一騎打ちの奇襲を行ふを許さずして、必ずや背後に此の奇襲部隊を掩護すべき有力なる部隊が無ければならぬ。バ氏の書いたアツブルトン枝隊

の派遣はトラツク遠征軍の豫備的行動としては必ずしも不合理に非るも、之を爲さんには日本の手中にありて、其の奇襲部隊並に輕艦艇の横行するヤルト、ボナベを放任するを許さないから、之に對して何等かの措置を講ずべきは至當である。然るにバ氏は思ひ茲に及ばずして所謂一騎打ちの奇襲を行はしめんが爲め、アツブルトン枝隊をばトラツク島の東方に於て日本軍が正規の哨戒配備を取りつゝあらざることを確認、且日本と濠洲との貿易を阻害せしめんとして之を派遣して居る。これ既に氏の兵術思想の幼稚なるを示すものである。

加之ならず日本軍のサモア遠征の如きは當時の戦勢より觀て日本の高級司令部が斯る愚劣なる過失を犯すものとも思はれない、サモア遠征の如きは日本が米國艦隊の主力を撃破して太平洋の海權を己の手に掌握せる時か、又は少くも布哇攻落後に非んば危険である。此日本のサモア遠征の動機は、米國艦隊が同島を根據として濠洲との日本の貿易を阻害するを妨

ぐるにありとはバ氏の説く所なるも、既に比律賓群島が日本の掌中にある限り、日本の艦隊は之を根據として敵の通商破壊戦に對抗するを得べく、必ずしもサモアを占領して米艦隊の根據を覆やさざる可らざる程、然く恐るべきものでない。否、一步を譲りて論ずるも、濠洲との貿易の杜絶は日本の死生存亡に關する程重大な性質のものでないのである。

次に日本の陸軍輸送船隊を掩護せる艦隊の編成の如きも亦頗る兒戲的である。殊更に老朽の装甲巡洋艦四隻を撰みて危地に突入せしめ、所謂一騎打の奇襲を試みて之を攻略せんとし、其間更に遠征の目的を達成せしむる様何等慎重の配備をも行はざるバ氏の筆は、餘りに日本高級司令部の手腕を侮辱せるものである。之を日清日露の兩戦争に見よ、日本の高級司令部は、敵地の占領を行はんとするに當り、斯る輕舉の策を取れりや如何。少しく此等の戦史を讀めば何人にも明かなるが如く、日本の計畫は周到にして慎重、一も斯る一騎打的奇襲を演ぜるものは無い。

之を要するに本章盡く所のバ氏の筆は海戦の智識を有する者の所作とも思はれない。唯だバ氏の深意が、南太平洋上に於ける米國唯一の屬領たるサモアの防備薄弱なるを指摘して、米國民を警醒せんとするにありとせば、茲に始めて此兒戲的海戦も其意義を有することゝならう。

一五

米軍が太平洋中部に於ける主作戦を容易ならしめんが爲め、北方ダツチハーバー方面より一部の伴動を行ひ、我北海道附近に或種の攻撃を企つることあるべきは素より至當の戰略で、日本は亦斯ることあるべきを豫期せねばなるまい。唯だ茲に注意すべきは、此種の攻撃は前記の如く本攻撃の爲の牽制伴動に過ぎずして、該方面よりの本攻撃は天候其他根據地等の關係より到底實施するを得ざるが故に、日本としては之に釣り込まれて我兵力を重要な主戦舞臺より分散せざる様、周到の注意を加ふることが肝要

である。由來日本人は感情に走り易く、冷靜堅忍の美を缺ぐので、此種の攻撃を受けたる時、兵理の上に立てる當局者の措置を魏然として支持し得るかは疑問とする所で、鑑例遠からず、浦鹽枝隊の上にある。日露戰爭中浦鹽枝隊が猛威を振ふて我陸軍運送船を撃沈し、我商船を破壊拿捕するや、一部の人士は上村艦隊の爲すなきを非難して、遂には同提督の邸内に石を投ずる輕卒兒を出すに至つた。當時日本艦隊の勢力は露國艦隊と略ほ相伯仲して居たので、日本高級司令部の作戰方針は、先づ旅順艦隊を殲滅するを主目的とし、對馬海峡に配せる上村枝隊の任務の如きも、此旅順艦隊が旅順を脱出して浦鹽艦隊と合同するを妨ぐるを第一義とし、浦鹽艦隊の撃滅の如きは副次の目的として、成し得れば之を撃破すべしと云ふに過ぎざる底のものであつた。さればこそ上村枝隊は對馬海峡に配せられて、合同を妨ぐるに最も有利の位置に置かれたもので、若し始めより浦鹽艦隊を撃滅するを主任務としたならば、寧ろ之を浦鹽に近き根拠地に置かねばならなかつた。

のである。唯だ如何せん當時の相伯仲せる彼我の兵力を以てしては、我が相對的優勢を以て敵を個々に撃破するの外策が無つたので、日本の高級司令部は浦鹽艦隊が猛威を逞ふることあるべきを豫期しつつも、瞑目して之を忍ばざるを得なかつた。然も兵理の何物たるを知らざる一部の國民は、輕舉妄動して連りに上村提督を非難した。余は當時上村提督が此の苦境に立ち、有ゆる非難を一身に受けつゝも、悠々として對馬の海邊に釣を垂れつゝ、あつた提督の心事を回想して、其餘裕綽々敢て動せざる英雄の風采を欽慕し、同情を禁じ能はざるものである。知らず日米戰爭に於ては、我國民は眞に克く這般の眞相を解し得るや否や、これ余が大に我國民に警告せんとする所である。

パ氏はダッチハーバーに於ける米軍の活動に對して、日本軍をして先づ之を攻撃せしめて居る。日本が該港に對して攻勢に出づべきや、又は退て守勢を取るべきやは、一に懸つて天候の状態と時の戰勢の如何によるを以

て、今遽かに其是非を評論するを得ない。唯だ該方面に於ける空中攻撃の非常に困難なるは、霧の米國世界一周飛行機の實例に徴するも明白にして、此點に關しては、バ氏の筆も必ずしも無根のもので無いと思はれる。唯だ茲に奇怪なるは、サモア遠征の如き遠く敵地に突入するものには、其掩護艦隊として考朽低速の四裝甲巡洋艦を以てせるに對して、此ダッチハーバーには多摩級の快速四巡洋艦を配し、爲に却て本末を顛倒せるの一事である。本國方面より餘りに遠隔せず、且諸般の便宜を受くるに比較的便利の位置にあるアラスカ方面にこそ、寧ろ低速の老朽巡洋艦を派遣すべきものである。若しそれ鈴木中佐の率ふるペーの行動に至ては最も適切の策なりと云ふべく、中佐に劣らざる幾百の勇士は必ずや己れに先づ之を命ぜられんことを志願するに違ひない。

日本の海外貿易に對して米國が取らんとする通商破壊戰中、濠洲方面に對するものは、比律賓群島が日本の手中に在る限り敢て恐るゝに足らざる

は既に説ける所である。バ氏の筆は米國巡洋艦の活動を述べて、之が爲め日本は最大なる打撃を受くるが如く説くも、此の米國巡洋艦の活動を掃蕩せんとする日本艦隊の作戦を記述せざるは非實戰的である。唯だ茲に問題となるは、濠洲方面に於ける通商の保護及破壊の問題よりも、日米戰爭の場合濠洲政府が其日本への輸出品に對して如何なる態度を取るかの點である。英國特に濠洲は米國に對して好意的中立又は與國と爲るものと想像せらるゝ以上、如上の問題は日本が豫め慎重なる攻究と準備とを爲し置くべきものである。

歐洲方面との日本の通商破壊戰には米國は最も有利なる位置に在る。蓋し日本の商船は頗る長遠なる航程を取るに反して、米國は大西洋を隔て之と相對するが故に、比較的容易に通商破壊戰を實施し得るからである。果して然らば西比利缺道の利用は日本にとり重大問題となるべく、茲に又日露の提携が必要となつて來るのである。吾人は種々の方面より觀て、日本

は露國に對し其共產主義を恐れて敬遠主義を取らんよりも、寧ろ之と接近して之を利用すべきものと信じて居る。

一六

バ氏の筆が日米假裝巡洋艦の戦鬪を記述して、日本の快速商船が海軍當局の注意に依り、其建造法を幾分巡洋艦に近遜せしめ、依て以て大勝を博したと記せる一條は、日本に對しては素より、各國の商船建造者に對しても一のヒントを與ふるものである。抑も戦時に於ては多々益々辨ずる軍艦殊に巡洋艦の缺陷を補はんが爲め、商船を假裝巡洋艦に改装するの必要は一目瞭然で、從て平時に於て豫め之が準備を爲し置くの必要なることも素よりである。特に日本の如く他給他足の國で、國外よりの物資輸入の如何が國民の生存問題に關するが如き國柄に於て最も然りとする。露の華府會議に於ては、商船は軍艦に變更するの目的を以て、平時之に武装を施すの準備を爲すを得ざるも、口径六吋を超へざる砲を裝備する爲め、必要なる甲板の補強設備を爲し得ることを認めて居る。併しながら戦時に於ては各國は必ずしも此の制限を遵守するの必要はないので、或は六吋以上の砲を裝載する者もあるべく、從て平時より如何なる砲をも裝載し得る様其準備を爲し置くとも、一々之を精細に檢定するの困難なる爲め、此規定の嚴格なる適用は先づ以て不可能と見ねばならぬ。我海軍當局者に這般の遠謀深慮ありや否やは之を知らざるも、少くも斯る事あるべきを豫期して事前の策を講じ置くは必要であらふ。

尙茲に附言せんとするは商船の定義である。此商船の定義は各國各々其見る所を異にし、露の華府會議も之に明確なる定義を與へて居ない。例へば伊國は商船を武装せざる、且戦時禁制品を輸送せざるものと定義し、英國は商船とは貨物又は旅客を輸送するもので、何れも國有にあらずして私人の所有に屬するものとし、斯の如き商船は當然防禦の目的に向て武装し、

且彈藥を輸送し得るものと解釋し米佛は商船は軍艦を攻撃し得ずとして其武装を否認して居る。華府會議は戰時に於ける商船の武装を認めたのであるが然も商船の定義が明かならざる以上種々なる見解の相違を來し茲に紛争の原因を残して居るのは注意すべき點である。

バ氏は本書に於て露支兩國の排日的態度を指摘し遂には支那をして日本に宣戦し露國をして樺太全部を占領せしめ又朝鮮及臺灣に於ける反亂を述べて背後より日本を衝かしめんとする一種の煽動的筆を弄し以て日本を苦境に陥れしめんとする誠に至れり盡せりの觀あるも翻て米國側を見れば唯一布哇の反亂さへも在住日本人の反亂のみに限られて居る。然るに日米戰爭の場合米國はバ氏の畫くが如く日本以外の諸國に對して果して安閑たり得るか茲に大なる疑問がある。

前にも述べたる如く諸國間の紛争を解決せんとする國際聯盟又は其他の方法による今日の解決法は關係諸國を紛争當事國の何れかの側に加擔

せしむる結果茲に右の關係諸國は二大團體に分るゝこととなりて稍もすれば僅に二ヶ國間の戰爭が世界各國をば其渦中に卷込み第二の世界大戰を再びするの憂がある。假りに英國若し米國に加擔して起てりとせよ歐洲に於て虎視耽々英國の虚を狙ひつゝある佛獨露等の諸國は如何なるべきか必ずや時こそ來れと奮起すべく同諸國民も亦驟起して獨立の叛旗を翻すであらふ。印度は露國の手を借らずとも奮然起て英國の桎梏を脱せんとすべく一言にして云へば世界は蜂の巢の如き亂狀を呈すること必ずしも空想でなひ。此時に當り平生米國の横暴に苦む中南米諸邦殊に墨西哥の如きものが茫然指を啣へて之を傍觀するものとは何人が信するを得よう。否日米戰爭は此等の反米諸國にとりては正に乗すべきの好機で巴奈馬運河の如き必ずしも日本人の手を藉らずとも此等の反米國民が之を閉塞することあるべきは夢想でない。若しそれ米國にして露支兩國民を煽動して背後より日本を衝かしめんとするならば日本も亦此等反米諸

國民を煽動して背後より米國を衝かしむるの正當なる理由を發見すべく、只一布哇の反亂のみを以て已まないであらふ。然も日本の退嬰的外交が速大の眼を以て此點に及ばざるは吾人の竊に遺憾とする所である。之を要するにパ氏の筆は前にも云へる如く日本に不利なる點を指描煽動するに汲々たるも、反對に米國に不利なる點、延ては英國に及ぼすべき影響に就て何等述ぶる所なきは余の不可解とする所で、氏の深意の那邊にあるやは之を見て推知することが出来ると思ふ。

一七

米軍がグワムと比島を奪回せんとして、先づ我が南洋群島に足場を固めんとするの計畫は着々として實施され、其第一着歩としてトラックは六月二十八日に何等の抵抗なく米軍の手中に歸し、翌七月にはヤルート、ボナベも亦殆んど論するに足らざる輕微なる抵抗の後これ亦米人の有となつた。

これ實に開戦後一ヶ年半の出來事である。然らば日本軍の手中にある此等の南洋群島は斯く容易に米軍のものとなり得るか、茲にも亦大なる疑問がある。

之を日本側より見るに、米艦隊の西太平洋進出を不可能ならしめんとならば比島とグワムを堅く其手中に握り置くを絶對條件とし、此の比島とグワムを掌中に握らんには、更に我が南洋群島殊にヤルート、ボナベ、トラック、アングウル等の要地を確實に握り置くことが先決條件である。實に米艦隊にして進んで如上の四地を占領するに成功せば、日本の第一關門は茲に破れたるもので第二の關門たるグワムも比島も危険の狀態に陥るものである。されば日本軍としては全力を盡してこの第一關門たる南洋群島を保持するに努むべく、之が爲めには輕艦艇殊に高速の巡洋艦は素より、驅逐艦潜水艦等が航空機と協力しつゝ、米軍の該群島占領を妨害すべきは素よりである。

然るに今バ氏の畫く所を見るに、日本は恰も此重要な關門をば放棄したるもの、如く殆んど何等の措置をも講せずして米軍の占領に委ねて居る。これ事實を距ること頗る遠きものであらふ。(第一)米艦隊の大部はトラツラ占領に先ち、必要なる補助部隊を隨伴して布哇よりツツイラに至り、ツツイラより更にトラツクに向つて居る。斯る大部隊の航行をば南洋群島を根據とする日本の偵察部隊殊に飛行機が之を偵知し得ずとするが如きは餘りに日本海軍を侮辱したるものである。米艦隊は一度布哇を出づるや、必ずや潮々として日本奇襲艦艇の襲撃を受くべく、殊に速力遅き補助部隊が甚大なる損害を蒙りて、米軍の作戦に至大の障害を與ふことは必ずや之を豫期し得よう。況んや米艦隊が據て以て其根據とせる根據地の如きも、充分なる防備を有せざる關係上、茲にも亦日本奇襲艦艇が牙を磨ひて應接に遑なき程攻め寄するに違ひない。されば米軍若し日本の手中にある南洋群島を奪取せんと企つるならば、此奪取戦こそば日米戦争中の最

も複雑にして最も壯絶快絶なる戦闘舞臺となるべく、最後に起る日米主力艦隊の決戦の如きは、此の争奪戦の總括りをつけるものに過ぎざること、ならふ。余は信ず、眞に日米戦争を畫かんとせば、讀者の感興をひくに足る劇的材料は必ずやこの南洋群島の争奪戦に求むべきものなりと。然るにバ氏は無理にも日本を負かさんとして、特更に此の重要な舞臺面を看却し、恰も南洋群島は米軍の爲に開放せられあるもの、如く畫ひて居る。茲にバ氏の妄想と矛盾がある。

斯の如く南洋群島の占領には米軍は多大の犠牲を拂ふことを覺悟せねばならぬので、之を決行せんには、先決條件として米國艦隊が日本艦隊よりも或程度の優勢を保持する時機を選ぶことを必要とする。若し之に反してバ氏の畫けるが如く、日米艦隊の勢力の差隔が餘りに大ならざる時に行ふに於ては、これ却て日本の乗すべき好機となり、日本は寧ろ進んで敵を撃破するに努むるに違ひない。されば米軍の高級司令部が斯る無暴の舉を

敢てせざるは當然で、バ氏の筆の如きは米軍の將士を苦笑せしむるに過ぎまい。況んや歩一步日本の根據地を奪取しつゝ、遂にグワムや比島を奪回するに適當なる根據地に辿りつくの結果は、相當の時日を要すべく、バ氏の畫けるが如く僅に半歳以内に之を達成せんとするが如きは痴人夢を説くものに異らない。

南洋群島の奪取が、上説する如く甚だ困難にして大なる危険を伴ふものとすれば、米軍としては寧ろ英國の好意に依頼しつゝ、パプア邊に英國の一港灣を借受け、之よりして比島の奪回と、日本の海外との通商破壊に全力を注ぎ、以て比較的容易に日本を屈するの策を講ずるは最良策と云ふべく、余は實際の戰爭には米軍は寧ろ斯種の方策を採るものと信じて居る。

一八

トラック、ヤルット、ボナへの占領に成功した米軍は、次には比島を奪回せ

んとする作戰の準備としてアンガウル島を占領するに決し、一方には四船艦隊をグワム方面に伴動せしめて、如何にも同島を攻略せんとするかの如く装ひ、日本の主力艦隊を同方面に牽制し置きながら、其虚に乗じ、大なる抵抗なくアンガウル島を占領して居る。即ち米軍はグワムを依然日本軍の掌中に残しつゝ、先づアンガウルを占領した。バ氏の此作戰は兵術上より觀て果して適當なるか？

米艦隊の作戰目的は前にも云へる如く日本主力艦隊の撃滅にありて、比島やグワムの奪回も要するに此作戰目的を達せんが爲の手段に外らない。茲に於て此日本艦隊を誘出するの方策としてグワムと比島の何れを先に占領すべきやの問題が起つて来る。此兩島は之を同時に占領するを得ば米國にとりては最も好都合ならんも、斯の如きは當時の兵力より見て到底不可能である。日本にとりては米軍の比島占領はグワムよりも一層痛切にして、殆んど其咽喉を扼せらるゝに等しきも、グワムが尙依然として日本

の掌中にある間は、米軍は背後の連絡線を遮断せらるゝこととなりて、非常なる苦痛を感ずるは明かである。されば米國の爲に圖るに、安全なる策として、比島よりも先づグワムを占領すべく、幸に日本艦隊出動し來らば之を撃破するの機會もあるべく、若し出動し來らずとするも、グワムにして一度米軍の手中に歸せば、西太平洋に於ける米軍の位置は、茲に頗る強固となり、日本は同島を根據とする米國艦隊の行動半徑内にある關係上、比島には稍々劣るとするも、然も非常なる苦痛を感ずることとなり、結局は米軍の企圖する、日本主力艦隊を誘出して之と決戦するの機會をも生ずることとなりふ。

然るにバ氏の書く所を見るに、氏は此の重要なグワムを放任しつゝ、先づ比島占領の豫備手段としてアンガウルを占領せしめて居る。アンガウル島の占領はグワムに比し一層容易ならんも、同島が大艦隊の根據地たるに適する良好なる泊地を有せざる上に、地勢上比島とグワムにある日本艦

隊が東西より之を夾撃し得るの結果は、例へ之を占領し得たりとするも頗る不安なるを免れまい。否一步を進めて論ずる時は、グワムを占領せばアンガウルやヤップの如きは勢ひ米軍の手中に歸するものである。然るを何を苦んで先づアンガウルを占領するの必要あらふ。茲に氏の淺薄なる兵衛思想がある。氏曰く『多數の論者或は米軍が斯くも西方に深入りして、危険を冒しつゝ、アンガウルを占領するは、恰も獅子の頭に頭を突込むものと非難するかも知れない。然しながら更に深く考ふれば、此見解は誤つて居る、何となれば米軍はペリユー群島に足場を固める前に、既に同群島に至る主要なる航路を脅かし得る様な根據地をば着々として攻略し、然も此等の根據地を利用して全交通線を充分に警戒し得る様、迅速に其手段を講じたからである』と。奚んぞ知らん、グワムにして日本軍の手中に在る以上、此等交通線の安全は決して之を期待し得ざることを。氏更に曰く『勿論日本の巡洋艦又は潜水艦が、此等の交通線を扼して米國の運送船隊に攻

撃を加へ、不安の種を蒔くばかりか、時としては之に重大なる損害を與へ得るかも知れない。併しながら斯種の攻撃は戦争の上には何等決定的の影響を及ぼすものでない。何となれば今や米國の主力艦隊は此等哨線の後方に位置し、其占領し得たヤルト、ボナベ、トラック、及アンガウルの根據地で燃料を補充し得るので、東方の根據地布哇と連絡をとるの必要もなく、布哇比島間の如何なる地點をも全力を擧げて之を攻撃し得るからである』と。氏の兵術は腹背に敵を受けつゝも、強ひて前面の敵のみを見て之に満足せんとするものである。

一九

アンガウルの占領に非兵術的筆を揮ふたバ氏の日米戦争は、更に一段の矛盾と背理とを發揮しつゝ、日本主力艦隊を誘出するの方策として、四船艦隊を以てヤップ島の擬襲を行はせて居る。茲に至て氏の筆は氏自ら稱す

る合理的範圍を脱して一個の冒險小説と化し去つた感がある。

前にも説ける如く、日本艦隊を誘出するの策としては寧ろグワムを攻略するを最良とし、然もグワムの占領は比島以外の日本の手中にある南洋群島をも勢ひ米軍の手中に歸せしむるを以て一舉兩得の策である。ヤップ島はグワムを距ること僅に四百五十哩、斯る近距離に於て、然もグワム島に日本の有力なる航空隊や奇襲艦艇あるを豫期し得る時、四船艦隊を放つて日本人を欺かんとするが如きは餘りに兒戲的である。

假りに一步を譲り、右の四船艦隊が日本の航空機や奇襲艦艇に發見されざりしとするも、日米主力艦隊の決戦を前に控へながら、何人か米軍が數隻の精銳なる戦艦を以て要塞に戦鬪を挑むものと考へることが出来よう。蓋し抑も軍艦が陸上砲臺と砲戦するは特殊の場合の外大禁物とされて居る、蓋し効果少くして損害大であるからだ。されば眞に要塞を砲撃するの必要に會せば、成るべく敵陣の彈着距離外なる遠距離より大口徑砲を以てすべ

きものである。然るにバ氏の書けるヤツプ島砲撃を見るに、主砲は成るべく之を發射せず、然も微力なる六吋砲を以てするに至り、日本の守備軍たるもの如何で此の奇怪の戦術を疑はざるものがあらう。此邊の叙述は餘りに非兵術的で、恰も一片の冒險小説を讀むが如く、合理的基礎よりも寧ろ劇的興味の方津々たるものがある。

次にバ氏は此のヤツプ島の擬襲に際し、日本主力艦隊を邀撃すべき方策として、テンプルトン提督麾下の米國主力艦隊を次の如く配備して居る、即ち日本艦隊の來攻を報ぜんが爲には、ヤツプの西百五十哩の處に約二十隻の潜水艦を南北の一線上に配備して哨線を形成せしめ、提督麾下の主力艦隊は、豫想し得べき日本艦隊のヤツプ島接近時刻に同島の東方七十哩の特定地點に達せしめ、次に前記の潜水艦が日本艦隊の來攻を報ぜば、提督は全速力を以て北に急航し、ヤツプとウルシー間を通過して、北西方向に向ひ、茲に其艦隊を日本艦隊と比島との間に置き、以て退路を扼せんとして居る。

然しながら余を以て見れば、テンプルトン提督麾下の主力艦隊にして如上の目的を達せんとすれば、成るべく其行動を日本軍に隠蔽するの必要上、グワムに近きヤツプの東方航路を取るは危険と云ふべく、寧ろ其西方航路を取らしむるのが安全であらふ。

翻て日本側を見るに、バ氏の筆はグワムや比島を根據とする日本軍の航空機、奇襲艦艇の活動を一切忘却して、米艦隊の行動を自由自在ならしむるが如き非實戰的戦況を畫くと共に、日本の大本營をして、平賀提督に行動の自由を與ふることなく、無理にも艦隊の出撃を敢てせしめ、斯くて此の海軍戰略の何物たるを知らざる陸軍主腦部の制肘の爲め、遂に大敗を招かしめて居る。日清戦争は措て之を論ぜずとするも、日露戦争以來我大本營の策定せる作戰大方針は、常に鞏固たる兵理の基礎の上に立てられ、陸海兩軍各其分を守りて、作戰の大眼目に向ひ和衷協同せしは、苟も戦史を研究せるもの、等しく首肯する所であらう。實に岡外の主將の如きも常に慎重なる

詮考を盡して至良を登用し、一旦任命せば輕々しく之を左右することなく、戰陣の事大小となく之に委ねて、中央より制肘することを避くるを日本軍の傳統的美習として居る。さればバ氏の如上の記述の如きは深く日本の戦史を攻究せざる者の放言に外らずして、日本人を誣ふる甚だしきものと云はざるを得ない。余は信ず、バ氏の書ける日本の艦隊司令長官平賀大將の如きも、孫子の所謂、故戰道必勝、主曰無戰必戰可也、戰道不勝、主曰必戰無戰可也、故進不求名、退不避罪、惟民惟保、而利於主國之寶也、の人なるべきを信じて疑はない。

二〇

日本艦隊を再三再四詭計に陥らしめて、恰も敵手により操縦されつゝあるかの如き奇觀を呈するバ氏の米國の作戰は、ヤツプ島の擬襲其效を奏し遂に日本主力艦隊を同島方面へと出動せしめて、茲に兩軍主力艦隊の大決

戦となり、日本側は脆くも惨敗して居る。然も斯の如きは始めより日本を負かせるを主眼として書いた以上素より當然のことで、何等異とするに足らない。されば其間に幾多の矛盾と不可解と不合理が含まれて居るのは當然である。今左に其一二を指摘して見よう。

第一に指摘すべきは、バ氏の書いた日米兩艦隊の勢力を以て、日本側が然く大敗する理由何れにありやと云ふ事である。今兩艦隊の勢力を比較するに、米國側は十六隻の戦艦、二十三隻の巡洋艦、百十五隻の驅逐艦、八十隻の潜水艦、五隻の航空母艦に對して、日本側は七隻の戦艦、五隻の巡洋艦、二十三隻の巡洋艦、百隻の驅逐艦、九十四隻の潜水艦、四隻の航空母艦で、主力艦以外の各艦種は兩軍共に相伯仲して居る。然るに此主力艦の如きも日本側の十六吋砲二十四門、十四吋砲九十門に對し、米國側は十六吋砲二十四門、十四吋砲百二十四門、十二吋砲二十二門であるから砲力の優越は素より米國側にあるも、日本は快速の巡洋艦五隻を有するので、之を利用して戦術上

有利の對勢を占め得べく、果して然らば如上の如き米軍砲力の優越は必ずしも意とするに足らない。余はバ氏の畫ける兵力を以てしては、日本側は優に戦ひ得るものと信じて居る。

第二に、茲にも亦日本艦隊は敵主力艦隊の出動を知ることなく、敵はヤツプに眞の攻撃を行ひつゝあるに非ずやとの疑念の下に誘出されて居る。前にも云へる如くグワムと比島が日本軍の掌中にある以上、米國艦隊が日本の嚴密なる哨線又は空中よりの偵察を免れて、自己の行動を隠蔽し得るとするは餘りに獨斷的で實戰的でない。米國の潜水艦が日本艦隊の航路線の前方に哨線を張れると同様、米艦隊の前面にも同様の哨線を張れりとするは當然なるべく、況んやグワムと比島よりの航空機は、米艦隊の一舉一動をば事前に偵知し得るのである。されば日本の平賀提督は敵に先ち米艦隊の所在を知り得べく、之を己に有利なる様成るべく日本の根據地に近き海面に誘出し敵を我潜水艦の哨線上に導き、先づ敵の一二艦を屠り、然る

後之に決戦を強ふること必ずしも不可能であるまい。バ氏が這般の事情を念頭に置かざるは其當を得たものでない。

第三に兩軍の戦鬪を見るに、飛行機の爆彈投下の効果を過大視せる一方に、戦術上の關鍵を握る日本巡洋艦隊の行動を全然没却して居る。此巡洋艦隊の戦術的使用法に就ては茲に之を記述するの自由を有せざるも、バ氏の畫けるが如く、之を豫備として保存し置き、最後の場合に敵艦隊の後尾にある老朽戦艦を攻撃せしむる如きは全く其使用法を解せざるものである。之と同様に目下英米の惱みと羨望の的となつて居る日本の新式巡洋艦が、バ氏の畫けるが如く無爲無策であらふとは到底信するを得ない。

第四に日本艦隊に附屬する三十隻の大型潜水艦と百隻の驅逐艦が、戦鬪中の重要な時機に於て何等爲す所なかりしも奇怪である。殊に主力艦に對する驅逐艦の壯烈なる襲撃は、日本人の性格を發揮すべき好個の戦術で、日本海軍々人の傳統的精神とも稱すべきものである。

之を要するにヤップ島沖海戦の記述は、之を兵術眼を以てすれば殆んど云ふに足らざる平々凡々のもので、戦術もなく、恰も智略を有せざる者が一種の組打をなしつつあるものと評するのが至當であらふ。然しながら翻て考ふれば、バ氏如何に海軍通なりとは云へ、實際上の兵術的素養なく、且實戦の経験もなき氏に之を望むが如きは寧ろ不可能を強ひんとするものであらふ。

一一一

バ氏は日本の戦敗を、其主力艦隊がヤップ島附近に於て大敗せると、露支兩國の日本に對する關係惡化し、支那は日本に對して物資の供給は愚か更に一步を進めて日本に宣戦し、滿洲は勿論旅順大連をも占領し、露國は樺太の南半を占領したのと、日本の海外貿易は米國艦隊の通商破壊戦の結果殆んど杜絶し、國民は飢餓を訴ふる一方に、米軍は續々グワムと比島を奪回し

戦運愈々日本にとり絶望的となつたので、遂に日本國民に非戦熱高まり、結局上海に於ける媾和會議に依り和を米國に乞ふこととして、日米戦争の幕を閉ぢて居る。バ氏の云ふが如く日本の主力艦隊若し大敗すれば日本は萬事休すべく、日米戦争は茲に全く米國の勝利となるは疑ひない。然しながら善謀善斷の日本海軍高級司令部と百戦練磨の將卒とを以て、斯る大膽なる豫言を無造作に許し得べきや否や、茲に大なる疑問がある。

次に日本の持久力に就てもバ氏は餘りに之を輕視せる嫌がある。勿論他給他足の悲しき國柄にある日本としては、海外貿易が國民生存の爲に極めて重要なものなるは論なきも、バ氏の畫けるが如き不合理なる作戦を以て日本を屈せんとするが如きは痴人の夢に過ぎない。實に日本の封鎖を有効に行はんに、日本艦隊の二倍半以上の兵力を以て之を行ふの外なきは世界戦略家の等しく認める所で、假りに一時海上交通の杜絶を見たりとしても、僅に四五ヶ月間に戦意を棄てざる可らずとする如きバ氏の筆は、

日本の地理的状態乃至は日本國民の心理を忘却せるものである。

之を嚮の世界大戦中の獨逸に見よ。同國は聯合與國の數倍大なる艦隊を以て、長年月に亘る必死の封鎖を受け、四面楚歌のうらに在つて絶體絶命の境地に置かれたるにも拘らず、聯合國の封鎖は僅に半成の域を脱せなかつた。然も尙獨逸國民は有ゆる苦痛を忍びつゝ、四ヶ年の苦戦を繼續し、其潜水艦戦は稍もすれば英國の生存を危殆に瀕せしめんとした。若し獨逸國民の結合にして持續せられたならば、勝敗の數は未だ遽かに豫測を許さなかつたであらう。注意すべきは此の國民の團結力である。

若し日本にして露支兩國と堅く提携し、自由に物資を得ることが出来るならば、長期の戦争決して恐るゝに足らない。されば日本が長期の戦争に堪へ得るや否やは、此兩國との關係並に國民の耐久力と粘着力の如何によると云ふも過言にあらずして、茲に日本の爲には干戈に先つ事前の策が必要となつて來るのである。かの日米戦争の場合には、日本は經濟上より間

もなく敗戦すべしと輕々に論じ去る者は先づ此點を知ることが肝要で、余が此種の論者に與せざるの理由も亦茲に在る。

*

*

*

*

以上余は可なり詳細に亘つてパイオーター氏の『太平洋戦争』を論評した。今茲に筆を擱せんとするに臨んで次の一問を提起せざるを得ない、曰くバ氏の畫けるが如き不合理なる戦争方法を用ひずして、眞に首肯し得べき合理的方法を以てせば、其勝敗は果して如何かと。

天は日米兩國に配するに茫漠たる太平洋を以てして居る。此配劑は苟も太平洋の防備制限にして現状維持を保持する限り、米國の黄金の魔力も優大なる物資の力も、長鞭遂に馬腹に及ばずして何等決勝的結果を與へざるを示して居る。米國にして最後の勝利を夢想せば益々造艦に努めんも、日本は又海上交通線の安全を利用して之に對するが故に、主力艦隊の決戦や有効なる封鎖は容易に之を庶幾するを得ない。米國若し其豊富なる造

艦能力を利用し、日本の二倍半乃至三倍の海軍力を増建し得たりとするも、地の理と指揮統率の便とは、百戰練磨の日本海軍高級司令部をして米國必ずしも恐るゝに足らざるを感銘せしむるであらう。果して然らば米國にして日本を屈せんとすれば他に其方策を講ぜねばならぬ。

此方策とは他なし前説するが如く露支兩國を米國に與せしめて背後より日本を衝かしむると共に、英國を與國とするか、又は其好意的中立に依頼して米國艦隊の爲に英國の港灣を借受け、依て以て比島を奪回すると共に、日本の主要なる海外との交通線を脅威し、日本をして餓飢か降伏かの何れかを撰ばしむるにある。果して然らば日米戦争の勝敗は、干戈の戦ひよりも寧ろ此等三國を已に與みせしめんとする外交戰の如何に依て決すると云ふも過言でない。否一步を進めて論ずる時は、此三國との關係を事前に解決するを得ば、日米戦争は之を未然に防止するを得るのである。

米國或は英國を誘ふて己の與國とするか、又は其好意的中立を期待する

を得よう、然しながら英國艦隊が歐洲の海上を去ることは、これやがて虎視眈々たる歐洲諸國間の戦争を挑發するの虞がある。抑も今日歐洲の均勢を曲りなりにも維持するものは英佛の二國で、其背景を爲すものは英國の大艦隊と佛國の大陸軍である。日本を撃破せんが爲め英國艦隊の大部を太平洋に派遣するの不可能なるは、尙佛國の全陸軍が歐洲以外の戦争例へばモロッコ戦争に派遣する能はざると同一である。實に英國艦隊にして歐洲の海面を去らんか、佛國は之を好機として歐洲大陸に於ける英の霸權を根柢に於て覆へさんと努むべく、露獨の二國も亦時こそ來れと其手を伸ばすべく、其他英佛伊等の各系に屬して、動もすれば爆發せんとする歐洲東南部の諸邦も、紐帶茲に弛んで思ひくゝに其慾望を達せんとすべく、果して然らば歐洲の天地は已に形となりて紛亂に紛亂を重ねるものと觀ねばならぬ。況んや英國が戰亂の渦中に投ずるの結果は、回教諸國の奮起、印度の獨立運動等も相隨で起るべきを豫想し得るに於てをや。

加ふるに米國が露支兩國を煽動して日本に對せしむるの結果は、中南米の諸邦をして、米國に反せしむるの行動となりて現はれ來るとせば如何。日米戦争は遂には第二の世界大戦を誘起すべく、吾人はロイド・ジョウジ氏の秘書フキリツブケル氏の言を待つ迄もなく、斯る豫言の必ずしも空想に非るを信じ得るのである。之を要するに其本質に於て一種の疲憊戰たる特質を有する日米戦争は、之を日米兩國のみの戰とする時は餘りに無勝負である。之に反して若し其勝敗を決せんとして他國を誘ふ時は、稍もすれば第二の世界大戦を再びするの憂がある。斯くても尙戰はざる可らざるか、これ實に太平洋を隔て、相對する兩國民が眞摯に三省すべき要點である。余は信ず此戦争を未然に豫防すべき要縮も亦實に日米兩國民が此真相を知るにありと、バイウオーター氏の所説の如きは事實の前に眼を蔽ふものと云ふべく、世界平和を念とする者の採らざる所である。

バイウオーターの太平洋戦争と其批判終

(附表) 日米兩艦隊勢力表 (千九百三十一年中に完成の分を含む)

(第一) 日本海軍

進水年	艦名	排水量(噸)	速力(節)	装甲(吋)	主砲	魚雷管
一九二二	×加賀	四〇,〇〇〇	二三	一四	十六吋十門 五、五吋十二門	八
一九二〇	×陸奥	三三,八〇〇	二三	一三—一四	十六吋八門 五、五吋十二門	八
一九一九	長門	三三,六〇〇	二三	一三—一四	十六吋八門 五、五吋十二門	八
一九一七	日向	三一,四六〇	二三	一二	十四吋十二門 五、五吋十二門	六
一九一六	伊勢	三一,二六〇	二三	一二	十四吋十二門 五、五吋十二門	六
一九一四	扶桑	三〇,六〇〇	二三	一二	十四吋十二門 六吋十六門	六
一九一五	山城	三〇,八〇〇	二三	一二	十四吋十二門 六吋十六門	六
(ロ)	巡洋戰艦		五隻			

一九二三	赤城	四四,〇〇〇	三三	二	十六時八門	八
一九二三	×榛名	二七,六一三				
一九二二	比叡	二七,五〇〇				
一九一三	×霧島	二七,六一三	二七,五	八一〇	十四時八門	八
一九二二	×金剛	二七,五〇〇			六時十六門	

(八) 航空母艦

四隻

一九二八	×松島	五,八三三	二五	—	四,七時三門	—
一九二九	見島					
一九二八	沖ノ島	九,五五〇	二五	—	四,七時四門	—
一九二二	鳳翔					

(註) 外に補助航空母艦として博多を加ふ。

(三) 新式巡洋艦

三十三隻

一九二六	×足柄					
一九二八	×千歳					
一九二七	羽黒					
一九二九	橋立					
一九二八	嚴島					
一九二八	×笠置	一〇,〇〇〇			八時八門	
一九二六	妙高		三四	—	至十時六門	三
一九二六	那智					
一九二九	音羽					
一九二九	高砂					
一九二九	米澤					
一九二九	吉野					

一九二五	青葉	七、一〇〇	三四	八時六門	八
一九二二	古鷹	七、一〇〇	三四	三時四門	八
一九二一	加古				
一九二〇	衣笠				
一九二二	五十鈴				
一九二三	阿武隈				
一九二二	神通				
一九二二	鬼怒	五、五七〇	三一	五、五時六門	八
一九二二	長良			三時三門	
一九二四	那珂				
一九二二	名取				
一九二三	川内				
一九二二	由良				

一九二〇	木曾	五、五〇〇	三三	五、五時七門	八
一九二〇	北上	五、五〇〇	三三	三、五時七門	八
一九一九	球摩				
一九二〇	×大井				
一九二〇	多摩				
一九二三	夕張	三、一〇〇	三一	五、五時四門	四
一九一八	×龍田	三、五〇〇	三一	三、五時四門	六
	天龍				
一九〇二	春日	七、七五〇	二〇	八時一門	四
一九〇三	×日進	七、七五〇	二〇	八時六門	四
一八九九	×出雲	九、七五〇	二〇、七五	六時十四門	四
一九〇〇	×磐手	九、七五〇	二〇、七五	六時十四門	四

(未) 舊式巡洋艦 十四隻

一八九九	×吾妻	九、四二六	二二	七	八吋四門 六吋八門	四
一八九八	×八雲	九、七三五	二〇、五			
一八九八	淺間	九、七〇〇	二二、五			
一八九八	常盤	九、七〇〇	二二、五			
(註) 淺間常盤の二艦は砲力を増さんが爲め臨時八吋を十二吋砲に換装す。						
一九〇〇	阿蘇	七、八〇〇	二二	八	八吋二門 六吋八門	二
(註) 阿蘇は水雷敷設艦として用ゐらる。						
一九一一	筑摩 平戸 矢矧	四、九五〇	二六、〇	一	六吋六門 三吋四門	一
一九〇七	利根	四、一〇五	二三、〇	一	六吋一門 四・七吋十門	一
一九〇二	對馬	三、四二〇	一	一	六吋六門 三吋十門	一
(ハ) 機雷敷設艦 十二隻						

大部分は小型の有力ならざるもの

(ト) 驅逐艦 百〇八隻

此隻數は開戦初頭のものにして、大半は噸數一二〇〇噸以上、速力三四節、其後戦争終結迄に尙大型驅逐艦約五十隻を増加す。殆ど總ての驅逐艦は四七吋砲を主砲とす。

(チ) 潜水艦 百二十六隻

内六隻は日本海軍獨特の有名なる巡洋潜水艦にして、其他の大部は水上排水量一、〇〇〇噸以上の大型潜水艦とす。

(リ) 補助艦船 若干

哨艇、掃海船、潜水艦及び驅逐艦の母艦、工作艦、給炭船、給油船、其の他の補助艦船に關する詳報を得ず、蓋し戦時中商船の補助艦船として使役せられたるもの頗る多數に上り、また其の就役期間にも長短あり、一々枚舉に遑ないからである。

(第二) 米國海軍

(イ) 戦艦

十八隻

進水	艦名	排水噸(噸)	速力(節)	装甲(吋)	主砲	魚雷管
一九二二	コロラド	三三、六〇〇	二二	一六一八	十六吋八門	二
一九二〇	メリーランド	三三、六〇〇	二二	一六一八	十六吋八門	二
一九二二	ウエズト ヴァージニア	三三、六〇〇	二二	一六一八	十六吋八門	二
一九一九	カリフォルニア テネシー	三三、三〇〇	二二	一四一八	十四吋十二門	二
一九一七	アイダホ ミシシッピ ニューメキシコ	三三、〇〇〇	二二	一四一八	同	上
一九一五	アリゾナ ペンシルヴァニア	三一、四〇〇	二二	一四一八	十四吋十二門	二

一九一四	ネヴァダ オクラホマ	二七、五〇〇	二〇、五	一三、五一八	十四吋十門	二
一九二二	ニューヨーク テキサス	二七、〇〇〇	二二	一二、一四	十四吋十門	四
一九一一	アーカンサス ワイオミング	二六、〇〇〇	二〇、五	一一、二二	十二吋十二門	二
一九一〇	フロリダ	二二、八二五	二〇、七五	一一、二二	十二吋十門	二
一九〇九	ユタ	二二、八二五	二〇、七五	一一、二二	十二吋十門	二
(ロ) 航空母艦 八隻						
一九一九	アラスカ モンターク	二三、〇〇〇	二七	—	八吋二門	—
一九二五	カーチス(新) レキシントン サラトガ	三三、〇〇〇	三四、五	—	八吋八門	—

一九二〇	×カーチス(舊)	一五、〇〇〇	一〇.五	五時四門
一九二二	ラングレー	一二、七〇〇	一五	五時四門
一九二〇	ライト	一一、〇〇〇	一五	五時二門

此の外商船「ハーヴァード」「ハウストン」「シャプター」の三隻も臨時補助航空母艦として就役せり。

(ハ) 新式巡洋艦

二十六隻

一九二七	×アルバニー
一九二九	アトランタ
一九二九	×クリーヴランド(新)
一九二七	×コロンビア
一九二八	コロンブス
一九二八	デンヴァー(新)
一九二九	ガルヴェストン(新)

一九二八	ハートフォード
一九二七	インディアナポリス
一九二七	カンサス・シチー
一九二九	ロスアンゼルス
一九二七	×ミネアポリス
一九二八	オリンピア(新)
一九二七	ボートランド
一九二八	×トロイ
一九二九	ウイルミントン
一九二二	シンシナチ
一九二二	×コンコルド
一九二二	デトロイト
一九二三	×マーブルヘット

一〇、〇〇〇

三四

一 八時九乃至十二門 六

一九二四 メンフェイス 七五、〇〇〇 三三、七 一 六時十二分 一〇
 一九二二 ミルウオーキー
 一九二〇 オマハ
 一九二二 ラレ
 一九二二 リツチモンド
 一九二三 ×トレントン

(ニ) 舊式巡洋艦

二十一隻

一九〇六 シヤーロット 一四、五〇〇 二二、五一九 十時四門
 一九〇六 ×ミズーラ 一四、五〇〇 二二、五一九 六時十六門
 一九〇五 シアトル 一四、五〇〇 二二、五一九 (シヤトルは四門)
 一九〇三 ×フレデリック 一三、六八〇 二二、三六六 八時四門
 一九〇三 ハンチントン 一三、六八〇 二二、三六六 六時十四門
 一九〇四 ヒューロン 一三、六八〇 二二、三六六 二

一九〇三 ビッツバード
 一九〇三 プエブロ
 一九〇四 ×チャールストン 九、七〇〇 二二、五 四 六時十二門
 一九〇五 セントルイス 九、七〇〇 二二、五 四 六時十二門
 一八九一 ローチエンター 八、一五〇 二二、四一六 八時八門
 一八九一 五時八門
 一九〇七 パーミンガム 三、七五〇 二四 一 五時四門
 一九〇七 チェスター 三、七五〇 二四 一 五時四門
 サレム
 一九〇三 チャツタヌーガ
 一九〇一 ×クリーヴランド(舊)
 一九〇三 ×デンヴァー(舊) 三、二〇〇 一六、五 一 五時八門
 一九〇二 ドユモアーヌ
 一九〇二 ガルヴェストン(舊)

一八九六 ニュー・オルレアンズ 三、四三〇 二〇 五吋八門 一
 一八九二 オリムピア(舊) 五、八六五 二二、五 五吋十門 一
 右の中「ローチエスター」「オリムピア」の二艦は艦齡餘りに古く、實戦に適せず。

(ホ) 機雷敷設艦

十六隻

中「アルーストック」「シヨーマット」「バルチモア」「サンフランシスコ」の四隻以外は悉く驅逐艦を改装したる輕機雷敷設艦である。

(ヘ) 驅逐艦

二百七十五隻

大部分は排水量平均一、二〇〇噸、速力三十四節のもので、四吋四門、三吋二門、魚雷發射管十二門を備ふ。

(ト) 潜水艦

百十一隻

内譯V大型十二隻、T型三隻、S型五十隻、R型二十七隻、舊式潜水艦十九隻、此の十九隻は老齡艦で洋上戦闘に適せず。

(チ) 補助艦船

若干

哨艇、掃海艇、潜水艦、航空機驅逐艦の母艦、工作船、給油船、給炭船、その他の補助艦船の總數には、戦時中間斷なく變動が起つた。又種々なる目的に使はれた商船は、其數莫大な數に上つてゐる。

(註) X印は戦争中沈没したるもの。

告 白 廣 告

大正十五年一月五日
大正十五年一月十日

印刷發行

太平洋戰爭

不許
複製

編輯兼 財團
發行者 法人 文明協會

右代表者 市島謙吉

印刷者 關根慶寬
東京市牛込區早稻田町三十四番地

印刷所 早稻田印刷株式會社
東京市牛込區早稻田龜卷町三六二

東京市牛込區早稻田町三十四番地

發行所 財團 文明協會事務所

電話牛込三五四二番
接警東京二一八九〇番

告 豫 號 次

大山 郁夫推薦 堀江 頼廣譯 (三月刊行)
 (S. Herbe to: Nationality and Its Problems)

民族と其問題

要 目
 民族の性質・民族の形成
 力・民族の發達・民族と政
 治・大社會・民族の將來

階級意識に眼覺めたと云ふ世界は未だ民族意識の夢を捨てない。今や人々は民
 族と階級の十字路上に其意識を形作つてゐる。凡ゆる政治問題も相交錯する此兩
 者を中心に火花を散らしつゝある。此の期に際し吾々が本書の如きを得て民族問
 題の眞意を知り其將來に臨むは最緊急事であると信ずる。
 農學博士 佐藤 寛次講述 (二月刊行)

世界に於ける日本農業の地位

文明レク
 チュアー
 創刊號

古來農本を國是とし來つた我國にとり、農村の衰退不振は由々しき問題である
 而かも現在の農民の苦境はその極にある。然らば此が救出を如何にすべきかは焦
 眉の急である。本書は斯學の權威佐藤博士が複雑なる該問題に對し深奥の蘊蓄を
 傾けられしもの、將に農村問題解決の秘鑰と云ふべきである。

文 明 協 會 刊 行 書 總 覽 (十八年)

- 第一期 五十卷 一六
- 第二期 四十八卷 一四
- 第三期 二十四卷 一三
- 第四期 六十卷 一一
- 第五期 六十卷 一
- 計二百四十二卷

(自明治四十一年
 至大正十四年)

◎既刊刊行書 特別分頒規定

- 一、既刊書を特價にて解放す
- 一、一冊貳圓ノ、にて、隨意選擇の需めに
 應ず
- 一、六冊を一組みとし、一組拾圓にて需め
 に應ず
- 一、送料は全部本會に於て負擔す
 但し外國は差額實費を申受く

Will Durant:—Philosophy and Social Problems
哲學と社會問題 三五四頁
(要目) 歴史的觀察—ソクラテス、プラトオ、
アエコン、スピノザ、ニイチチエ、暗示—
—解決と批評、哲學の建設的作用、理智の
組織化、讀者の反問

John Leich:—Man-to-Man
人と人 四〇二頁
(要目) 今日の工場労働—ストライキは何故
起るか—利益を生む管理—インダスト
リアル・デモクラシー—國家第一労働第
二—小資本と其經營

R. Mäyver:—Labor in the Changing World
世界の變遷と労働 三六二頁
(要目) 労働觀念の擴張—産業的危機—勞
働状態に於ける新舊世界の對照—改造と
労働組合—労働移入民及出生率—婦人
の労働—大企業時代の—或實際的結論

H. Moderer:—The Theatre of To-day
近代劇の研究 三五四頁
(要目) 諸力の集合、機械力の参加、舞臺裝置、
純圖案、色彩、光線、風格化、米國舞臺圖案
界の新人、近代劇の哲學、佛、露、日、耳
受族幻想派の劇作家、近代劇場建築、組織、
經濟

Henry Van Dyke:—The Spirit of America
亞米利加魂 三八二頁
(要目) 國民精神—自恃心と共和政體—公
平の精神と民本主義—意志力、事業、富—
共同的秩序と社會的協會—個人的發展と教
育—自己表現と文學

E. Deckert:—Das Britische Weltreich: Ein
Politisch und wirtschaftsgeographische
Charakterbild
英國と其領土 三五〇頁
(要目) 大英帝國の領土的發展—大英帝國の構
成的部分—大英帝國の主要要害地點—大英
帝國を結束する經緯—ブリティン列島の地理
的構造—住民—諸小王國の統一—膨脹

Graham Wallas:—Great Society
社會の心理的解剖 四〇四頁
(要目) 大社會—社會心理學—本能と理性
—性向と環境—習慣—恐怖—
と幸福—群衆心理學—愛憎—思考—
—思考の組織—意志の組織—幸福の組
織

R.K. Dunkan:—The New Knowledge
現代科學の基礎 四三四頁
(要目) 現代の化學的概念—週期律—氣狀
イオン—自然の放射性能、物質の性質
—原子の崩壊—無機的進化—新しき
知識と古き問題

S. Brahm:—Mysteries of Life
生の神祕 三六四頁
(要目) 身體の神祕—天の神祕—地球の歴
史—人類の進化—性の神祕—苦痛の
神祕—神の默示—天國の神祕

F.T. Carlton:—Education and Industrial
Evolution.
教育と産業の進化 三六八頁
(要目) 現代の産業組織と教育概念の擴張—
教育上の新目的—新理想—教育の進
歩と産業の發達—藝術及技術運動—教育
的産業的意義—産業教育及職業教育—
不其兒教育—將來の學校

W.L. Mackenzie King:—Industry and
Humanity
産業の人道化 三九二頁
(要目) 産業及國際上の不安—世界及人類の狀
態—混亂と進歩—産業當業者—改造の基礎—
平和の基礎諸原則—仕事及健康の基礎的諸
原則—産業上の代表權及統治—教育と輿論

W. Carson:—The Marriage Revolt.
結婚の革命 三四六頁
(要目) 結婚の過去及現在—婦人の解放—
新道徳—理想的結婚—輿論—科學と
結婚—現時の惡弊と其救済策—結論

R. Stiner:—Der dreifache Staat
F. H. Giddings:—Responsible State.
三重組織の國家と責任國家論 三一六頁
(要目) 三重組織の國家——近代社會問題の眞
狀、必要なる實際生活、資本と人の勞動
三重國家の國際的地位、責任國家論
國家の起原、權力、權利、義務

B. Kidd:—Science of Power
社會遺傳 三五四頁
(要目) 西洋知識の挫折、世界的革命の集積、大
逆轉の中心、西洋倫理の終極面、大組織
の基礎、文明力は理性に不協、理想情緒は最
高原理、西洋奇怪の現狀、力の心的新中心
力の科學の根本法則、婦人は社會組織の中
心

Sir R. Lankester:—Secrets of Earth and Sea
海陸の神秘 三六〇頁
(要目) 有史以前の美術、石の比較研究、實在の
小人國、海空及實在の龍、蠍、石、巨大動物、
動物の毒と針、動物の保護色、ニエーショラ
ンフの動物生活、噴火、青き水、彗星、種の特
質、雜種 (總版)

D. Burns:—International Politics: Political
Ideals
世界政治へまて 三五二頁
(要目) 國內政治——自由と秩序、世界同胞主
義、歐洲一致、近世國民主義、帝國主義、個人
及社會主義、テモクラシー、國際政治、個人
權國家文化の差違、未開の國土、國際通商

J. Loeb:—The Organism as a Whole
生體論 四〇二頁
(要目) 生物、無生物の特異性差異、生の起原、
屬及種の化學的基礎、受性に於ける特異性
生物形成と卵再生、性的決定、メンアアリズ
ムと其機制、本能と趨向性、環境の影響、
生體の死及其分解作用

T. J. Lawrence:—The Society of Nations
國際社會史論 二八六頁
(要目) 國際社會の起原及發達——世界戰勃發
當時の國際法——國際法の部分的破壊——
國際法改造の要件——國際社會の改造と國
際聯盟

M. Beer:—History of British Socialism
近代英國社會主義史 三三四頁
(要目) 時代思想の主潮——國際主義及自由主義
勞動運動——社會主義の復活——社會主義の諸
國將フェビアン協會——獨立勞動政治運動
勞動階級——社會主義諸黨及勞動黨の改造

W. H. Mallock:—A Critical Examination
of Socialism
社會主義批判 三八〇頁
(要目) 社會主義の歴史的端緒——マルクス學說
の根本的誤謬——近世社會主義者のマルクス
に對する否認——個人主義者のマルクス
等——將來の社會政策と抽象的正義——機會均
等

Ropence and Johnson:—Applied Eugenics
應用優生學 三七二頁
(要目) 遺傳的環境の生體原形質の變化——人
類間の差異——心的能力の遺傳——優生運動の
起原——不適階級の制限的優生學の諸方
法——雄雌淘汰の促進——優生學の結婚及出
産率増加——戰爭——優生學より見たる社會問
題 (總版)

N. P. Lewis:—The Planning of the Modern
City.
現代都市計畫 三四二頁
(要目) 都市計畫運動、計畫の要素、計畫の經
濟的價值、諸工業、街路、交通、街路系統
と鐵道、市の土地政策、市技師の好機會
と責任 (總版)

A. Kenaly:—Feminism and Sex-Extinction
婦人解放と性の壊滅 四一四頁
(要目) 婦人と人類の進化——婦人に關する情
熱的謬説——性的傳達との不可思議の身
體的一面は男性性的傳達との不可思議の身
體退——女權主義に基ける古代文明の頹廢と
墮落——性の壊滅——男子の當面的服従

R. W. Turine:—In Tune with the Infinite
無限生活 三七八頁
(要目) 宇宙に於ける最高真理、人生に於ける
最高事實、平和の充實、愛の秘訣、力及於ける
果、先覺者、賢人の救世主と如何にして
なるか、宗教の根本原理、最高富の實現

故大隈重信侯遺著

東西文明の調和 五二〇頁

(要目)東西文明概論、希臘古代と支那古代の宗教、藝術科學、東西の道德思想、孔子とソクラテス、儒教とプラトン、學派との比較、その他東西教育の比較、東西文明變遷の比較、近代歐洲文明の發達 (絶版)

A.L. Smith:—How to be Useful and Happy from Sixty to Ninety

百歳不老 三二〇頁

(要目)六十歳以後を有益に暮らす法、長壽の秘訣、富の處分法、空氣と日光、幸福なる睡眠と不眠、酒煙草、未婚老婦人、老人の睡眠と不眠、人體の定期検査、老人に對する二三の箴言

Francoeo S. Nitti:—Peaceless Europe

平和なき歐羅巴 三八〇頁

(要目)平和條約と戦争の繼續、平和條約と起原及目的、勝者と敗者、敗者の賠償と勝者の心痛、歐羅巴の戰後改造と平和政策

Sendhal:—De L'Amour

愛 四三〇頁

(要目)戀愛の發生、希望、美の除外、心醉、紹介、慎み、瞥見、女の勇氣、奇妙な悲惨な光景、親密な交際、嫉妬、口論的戀愛、各國民と戀愛、女子の教育、結婚

E. Bontoux:—Science et Religion dans la Philosophie Contemporaine

科學と宗教 四三五頁

(要目)緒論、宗教と科學の歴史、自然主義的傾向、コンテと人道教、スパンサーと不可知者、ヘッケルと一元論、唯心論的傾向、ツチネルと根本二元論、科學の限界と宗教、活動の哲學、結論

G. Cunnam:—The Anatomy of Society

社會組織の解剖 三三二頁

(要目)定義觀、人類論、社會契約、家長制度、結婚論、公民としての婦人、科學と藝術、社會的建設、東洋と西洋、民本主義

N. Golovin:—The Problem of the Pacific in the Twentieth Century

今日の太平洋問題 四二〇頁

(要目)日本殖民の進路、現在の經濟狀態、近世日本の政治的特色、朝鮮及支那に於ける日本の政策、太平洋上の未來の關争、日米の海軍力、日米戦争の戰略的形勢、露西亞の關係、華盛頓會議

J. McCabe:—The End of the World

世界の終り 三三四頁

(要目)世界とは何ぞや、冥帝の木乃伊、氷河時代の脅威、衝突の機會、太陽の死滅、遊星の運命、星の消息、星の一代記、變光星、世界の復活、宇宙

W. Lippmann:—Public Opinion

輿論 四〇四頁

(要目)因襲、一般意志の構成、民本主義の概念、新聞紙、情報組織

G.T.W. Patrick:—The Psychology of Relaxation

弛緩心理論 三二八頁

(要目)緒論、遊戯の心理、笑の心理學、濟心の心理學、アノールの心理學、戦争の心理學、結論

W. Huchinson:—Civilization and Health

文明と保健 四三〇頁

(要目)文明の諸病、近代の肉體的退化、百歳長壽者、婦人の強靱なる神經、犯罪人の保健、勞働の衛生學、牛に對する犯罪、休暇の慣習、屋外より屋内生活へ、牛體解剖、近代の父性

G.D.H. Cole:—Social Theory

社會理想學 三六四頁

(要目)社會理論の模式、名稱と其意義、機能主義と代議制の模式と動機、國家論、民主主義、社會的經濟構造と立法、強制と統制、治、教育と自由、制度の虛脱

L. Doncaster:—The Determination of Sex
性の決定 三九〇頁
(要目)性の本性及其作用、性決定の時期、偏性遺傳、性決定の物質的基礎、兩性の比、第二次性別形質、雌雄同體兩型、性決定の原因に關しての總論、人間に於ける性決定、性の遺傳

E. Barker:—Political Thought in England from H. Spencer to the Present Day
近英國政治思想論 四五四頁
(要目)理想派——グリーン、ナラッド、レー、ホサンケット——科學派——レスペンサー以後——法學派、文學派——經濟學派

文明協會編
燃料問題の將來 四二二頁
(要目)燃料の種類——石炭及石油の供給——燃料缺乏及其救濟——新末石炭燃燒法——其の應用

F. S. Marvin:—Western Races and the World
世界文明の統一 三八四頁
(要目)一つの教育問題、連鎖としての言語、希臘人と未開人、羅馬帝國、基督教の影響、十八世紀の人道主義とその結果、歐羅巴とイスラム、印度問題、西洋民族と極東、熱帯地の經濟的榨取

E. G. Conklin:—The Direction of Human Evolution.
人類進化の歸趨 三六八頁
(要目)人類進化の経路と可能性——人類の過去の進化——近代の諸人種等——進化とデモクラシー——社會の生物學的基礎、人類の歴史上の進歩——進化と宗教——宗教の本質、自然と超自然、進化論と聖書、人類の本質

G. Valois:—L'Économie Nouvelle
新經濟學 四五四頁
(要目)教理——元始に言葉、ある、自由主義社會主義及現實主義經濟學——教理の對實業社會主義の知識化、生産の方法化及解放、實業主義、社會主義の衰退、生産者と經濟的帝國主義、同盟罷業と思想、專業主義同盟に就いて等

E. Carpenter:—My Days and Dreams.
吾が日 吾が夢 三五四頁
(要目)フライイトン、私の両親、ケンブリッジ時代、大學校外講演と北方都市、ブラッックウェルと民主主義の方へ、手工労働と茶園業、シエフアイランドと社會主義、商賣哲學、ミルソーブと家庭生活、ミルソービヤナ、自作物語、七十才となつて世界を如何に見る。

M. Paryshnik:—Ols. Ibrtezhennia
インテリエリゲンツィヤ 三九八頁
(要目)マシエフシエチナとは何ぞや——インテリエリゲンツィヤの歴史、マシエフシエチナの歴史、要點、批判、及社會主義批判——罪を悔ゆるラズノチエツツとは何ぞや——階級的觀念家と超階級的觀念家、社會的現象的現象Pと社會的倫理的現象R等

大日本文明協會譯編
近代科學の諸問題 二九八頁
(要目)天文學——有機化學——生物學——植物學——生理學——解剖學——地質學——火山學

大日本文明協會編纂
日米國際紀要 二五二頁
(要目)日米國際紀要——米國排日運動の沿革と移民問題——一九二四年米國移民法制定に關する各國現行法——附録、米國排日法の經過、日米私見

F. O. von Hismark:—Gedanken und Erinnerungen
政局は斯くして動く 三六四頁
(要目)ヴァイルヘルム親王、バーテン大公、ホエツァイツヘル、ヘルフルト、一月二十四日の樞密院會議、一八九〇年二月四日の敕令、變動、余の免職、カプリヴィ伯爵、皇帝ウイヘルム二世、ヘルゴランド及サンジバルに關する條約、德國との通商條約、書翰

E. Huntington:—The Earth and the Sun
地球と太陽 三六四頁
(要目)太陽の變動と地球上の氣温、旋風に及ぼす太陽の效果、太陽に基く氣温の調節、及近代の氣候變化の性質、太陽と地球との電氣的性質、黒點の起原、太陽に及ぼす流星の影響の性質

大日本文明協會編纂
比例代表制度論 三六八頁

(要目) 現行選舉制度の現狀
例代表の適用 比例代表制度に就いて
英本外國に於ける比例代表運動の選
權に關する觀念の變遷 英本國 伊太利
植民地の選舉 北米合衆國 佛蘭西 伊太利

H. H. Ellis:—The Dance of Life
生命の舞踏 四三二頁

(要目) 藝術としての生活—舞踏の藝術
—思索の藝術—述作藝術—舞踏の藝術
—本能と思索との關係—舞踏の科學者
—宗教としての宗教—宗教と科學との關係

J. A. Hobson:—The Economics of Un-employment
失業の經濟 三三六頁

(要目) 市場の有限—消費の減退—貯蓄
との均衡—景氣變動の心理及原因—貯蓄
防止策としての賃銀減小—景氣變動の原
—失業問題の內的觀察—國際労働立法

J. Michelet:—L'Insecte
詩の昆虫 三八四頁

(要目) 無限の生命—微細な地球建造者—愛と
死の蜘蛛の家—蟻の戦争—都市の全滅—
アジメの蟻蜂—蟻蜂の建築—人類補佐の
及化學力—蟻蜂の市民及共通母

W. McDougall:—The Group Mind
集團心理 四二二頁

(要目) 群衆の心的生活—高級組織集團—國民
—有期間の生活に於ける諸觀念—青年期に於ける
—國民生活の進歩—國民的發展の諸要素—國
民的な生活の條件としての交通の自由

M. Asquith:—The Autobiography of Margot Asquith
アスキス夫人自叙傳 四一〇頁

(要目) 家族、少女時代、ロンドンの社交界、求
婚、結婚、性、結婚、アスキス夫人の辭職、モ
戦争、聯立内閣、アスキス夫人の辭職、モ
八年の總選舉

A. H. Huxon:—Oerpos Oaxarri
サガレン紀行 三八二頁

(要目) ニコラエフスク市汽船パイカル號、長
太迄の航路、樺太の半島、日本探險隊、長
官ニコラエフスク、樺太の生活、ドワイカ
河、アレクサンドロフスク谷間、町及自由
村、樺太の巴里、樺太の職業、森林、エン
ルの話、燈臺、アルカイ河、森林、エン
リヤ、樺太、南北樺太、快活なる樺太人

文學士渡邊治郎氏著
日本社會運動史觀

(要目) 社會問題の意義及其研究の必要、歴史
上の社會問題、現代の社會問題、労働問題
貧乏問題、社會政策、社會事業、労働問題
發達、現時的労働運動、國際労働運動、社會
主義の發達、社會主義の主張と批判、無政
府主義、サンヤカリズム、皇室と社會問題

G. D. H. Cole:—Self-Government in Industry
産業自治論

(要目) ギルド社會主義の主張、労働組合の改
造、現在實業制の撤廢、國家の本質、新三
産業自治論、産業國有及び組織と消費者の關
係、戦時の労働政策

G. Wallas:—Our Social Heritage
社會傳統論

(要目) 事業及思想に於ける社會的傳統、團體
協同、思想及事實としての國民、國民的協
同の管理、職業團體、自由、權利、名譽及獨
立、世界協同、立憲君主國、科學、教會

S. J. Holmes:—The Trend of the Race
人類の運命

(要目) 遺傳の基礎、精神缺陷と病氣の遺傳、
心的才能の遺傳、人類の自然淘汰、戦争の
淘汰勢力、性的淘汰、血族結婚、産業發達
に及ぼせし人種的影響、宗教の淘汰作用

G. Gentile:—The Reform of Education
改造教育

(要目) 教育と國民性、教育と個性、教育の根
本的二律相反、教育の概念に於ける實在論
と觀念論、教育の統一、人格及體性、教育の理
想、見、教育の統一、人格及體性、教育の理

大日本文明協會編纂 歐洲大戰の經驗 佛國フイノイ氏原著 幸 福 學 絶版	大日本文明協會編纂 婦 人 と 犯 罪 大日本文明協會編纂 地 理 利 害 牙 利 米國キング氏原著	大日本文明協會編纂 教 育 と 社 會 丁抹クリステンセン氏原著 群 集 と 政 治 絶版	大日本文明協會編纂 戰時及戰後の經濟 絶版 獨逸フエルスラー氏原著	結婚と兩性問題 米國コングリン氏原著 遺 傳 と 境 遇 絶版	佛國マクスウェル氏原著 現代社會心理 絶版 大日本文明協會編纂 日 本 人 の 海 外 發 展 絶版	佛國ルカ氏原著 戀 愛 の 進 化 絶版 獨逸ゾンバルド氏原著 資 本 主 義 の 精 髓 絶版	獨逸ヒツピウス氏原著 兒 童 生 活 と 其 教 養 絶版 佛國ハルセーユ氏原著 暗 黒 面 の 獨 逸	英 國 ホ ル ム ス 氏 原 著 人 格 養 成 論 大日本文明協會編纂 日 本 の 科 學 界	佛國ル・ボン博士原著 歐洲大戰の心理的教訓	英 國 セ ム プ ル 女 史 原 著 地 的 環 境 と 人 生 英 國 ロ ヴ ァ 氏 原 著 心 靈 生 活	米 國 ド レ ッ サ ー 氏 原 著 能 力 の 研 究 絶版 米 國 グ ヲ ヌ ノ ー 氏 原 著 憲 政 の 運 用	米 國 ロ ヴ ク ヲ ヌ ヲ 氏 原 著 富 の 創 造 伊 國 ア リ オ ヲ ヲ 氏 原 著 現 代 哲 學 の 批 判 絶版	米 國 フ ゴ ヲ ヲ 氏 原 著 日 米 問 題 英 國 カ ア ベ ン タ 氏 原 著 愛 と 死	米 國 コ ー リ ヲ 氏 原 著 變 態 心 理 學 絶版
---	--	--	---	---------------------------------------	---	---	---	--	--------------------------	--	---	---	--	-----------------------------------

大日本文明協會編纂 民 衆 藝 術 絶版 獨逸フエルスラー氏原著 少 年 と 道 徳 絶版	米 國 シ ョ マ ヲ ヲ 氏 原 著 進 化 の 意 義 絶版 英 國 ハ ル デ ン ス ミ ス 氏 原 著 經 濟 的 道 徳 主 義	瑞 典 エ レ ン ケ ー 女 史 原 著 婦 人 運 動 英 國 マ ル チ ン 氏 原 著 最 近 化 學 界 の 驚 異	獨逸ノイハウス氏原著 獨逸國民の職業組織 米 國 ケ ー 氏 原 著 社 會 進 化 論	米 國 タ ウ ン 氏 原 著 社 會 問 題 米 國 マ ヲ ヲ 氏 原 著 歷 史 の 精 神 的 解 釋	米 國 ア ヲ ヲ 氏 原 著 歐 洲 の 改 造	大日本文明協會編纂 英 獨 教 育 の 比 較 米 國 コ リ ア ウ ル シ 氏 原 著 文 明 の 極 致	大日本文明協會編纂 科 學 的 管 理 法 絶版 米 國 ロ ビ ン ソ ン 氏 原 著 性 的 知 識	英 國 パ ア カ ー 氏 原 著 經 濟 的 經 國 論 米 國 キ ン グ 氏 原 著 生 活 費 消 滅 問 題	英 國 マ ー ビ ン 氏 原 著 西 洋 文 明 の 統 一 伊 國 ロ リ ア 氏 原 著 戰 争 と 經 濟 關 係	米 國 オ ヲ ヲ 氏 原 著 現 代 の 社 會 的 進 步 絶版 獨逸ニコライ氏原著 生 物 學 的 戰 争 觀	米 國 ラ ー フ ベ リ 氏 原 著 現 代 理 想 の 葛 藤 二 卷	米 國 ス テ イ ナ ー 氏 原 著 日 本 の 優 略 英 國 ガ リ カ ン 氏 原 著 結 婚 の 心 理 絶版	米 國 グ レ ゴ リ 氏 原 著 科 學 の 精 神 と 其 効 用 英 國 ハ ー ン シ ヲ 氏 原 著 岐 路 に ぞ も ク ラ ン 一 絶版	英 國 ジ ョ ン ス ト ン 氏 原 著 生 物 の 哲 學 大日本文明協會編纂 歐 洲 大 戰 と 發 明	英 國 ビ ー プ ル 氏 原 著 商 業 的 露 國 及 西 伯 利 米 國 ア ン ド 博 士 原 著 國 家 と 保 健	露 國 ト ト ミ ア ン ツ 氏 原 著 消 費 組 合 論 英 國 ラ ン セ ル 氏 原 著 社 會 改 造 の 理 想 と 實 際
--	---	--	---	--	------------------------------	--	---	--	--	---	--	---	---	--	--	--

大日本文明協會編纂 國際的現代日本 絶版	英國ギブソン氏原著 學術的發見史 絶版	英國ダーウイン氏原著 種の起原の基礎
獨逸ヘッケル氏原著 生命の不可思議 二卷	米國ウィリアムズ氏原著 科學の奇蹟 絶版	獨逸ルビン氏原著 現今の猶太種族 絶版
米國ガーバー氏原著 現代教育的運動	米國フラーソン氏原著 列強權力問題	米國マイノット氏原著 年齡成長及死 絶版
英國トムソン氏原著 遺傳	英國ホエザム氏原著 科學思想發達史 絶版	獨逸ツイグラー氏原著 近世獨逸社會思潮 二卷 絶版
佛國ギユスターヴ・ル・ボン氏原著 革命の心理 絶版	英國ホイットビー氏原著 人物の要素 絶版	大日本文明協會編纂 歐米の製造業 二卷 絶版
獨逸ビローロ公外二氏原著 獨逸世界政策	獨逸ヘルバツハ氏原著 風土心理學 絶版	伊國クロチエ氏原著 實際の哲學
塊國グロース氏原著 犯罪心理學 絶版	佛國ペロー氏原著 實證道徳 絶版	瑞西フオーレル氏原著 性慾研究

大日本文明協會編纂 歐米人の極東研究 絶版	米國アール・フインク・フィッソ 資本及收入論 絶版	英國ロツク氏原著 趨異、遺傳及進化
佛國エリ・メチニコフ氏原著 不老長壽論 絶版	英國ギブソン氏原著 今日の科學思想 絶版	西國テ・クイロス氏原著 近代犯罪學說
英國ヘレン・ツインメルン女史原著 伊太利及伊太利人 絶版	英國マクファアソン氏原著 近代思想界の變遷 絶版	英國ギブソン氏原著 近世應用電氣學
佛國アルフレッド・エミール・フイエ氏原著 歐洲各國民の心性 二卷	米國ハーター氏原著 生物學的的人生觀 絶版	米國クローツァ氏原著 世界的米合衆國 絶版
英國エム・ピー・ミーキン女史原著 過渡時代の婦人	米國カリーリントン氏、ミーダ 死の研究 絶版	獨逸ケブナー氏原著 植民政策 絶版
英國エー・アー・ウォーレス氏原著 生物の世界 絶版	大日本文明協會編纂 舞踊と歌劇 絶版	佛國クレマンソー氏原著 今日の南亞米利加 絶版
米國プランダー・マシユニス氏原著 歐洲演劇史 絶版	米國ロツス氏原著 社會統制論 絶版	獨逸ナウマン氏原著 經濟政策 二卷 絶版

獨逸エヒンゲン氏原著 變態性慾心理	獨逸オイケン氏原著 宗教の眞諦 二卷 絶版	獨逸オストワルド氏原著 價値の哲學
大日本文明協會編纂 國際商業及交通 絶版	英國ウエップ氏同夫人共著 國民共濟策 絶版	米國アダラフ氏、サムナー氏 勞働問題 絶版
米國チャールズ・ラック氏原著 勳力	米國ライト女史原著 北極	大日本文明協會編纂 墨西哥
獨逸ロバート・ミシホニス氏 原著 政黨社會學 絶版	獨逸ノルダウ氏原著 現代の墮落	英國ブレール氏原著 都市の兒童
英國ヘープリング氏原著 露國國民 絶版	佛國ルナル少佐原著 航空學 絶版	英國アラウン氏原著 近代立法の精神 絶版
英國マーティン氏原著 近代化學の勝利 絶版	英國フアイフ氏原著 現今の南阿	英國プライス氏著 西比利亞 絶版
米國ウオード氏原著 應用社會學 絶版	英國モルガン氏原著 比較心理學 絶版	英國エリス氏著 夢の心理
米國ダウエンボート氏原著 人種改良學 絶版	英國ジョース氏原著 濠洲及其諸島 絶版	英國メー少將著 軍事世界地理 絶版

大日本文明協會編纂 歐米人の日本觀 三卷	匈牙利ライヒ氏原著 國民功業論	大日本文明協會編纂 近泰西英傑傳 五卷
英國ヒアソン氏原著 國民性情論	英國クローマー卿原著 最近埃及 二卷	英國トインビー氏原著 英國産業革新論
佛國ブーミー氏原著 大英國國民	英國カルテコット氏原著 英國植民史	米國イリー氏ラツシグナル氏 社會政策二論
獨逸ミユステルヘルヒ氏原著 米國國民	英國植民史補選	伊太利ロリア氏原著 社會の經濟的基礎
英國ダウソン氏原著 現代獨逸の發展	英國パーカー氏原著 佛國人の佛國	英國ウエルス氏原著 近時の經濟變動
エミール・ライヒ氏原著 近世歐羅巴の基礎	英國ウイリアムズ・ウオーデ ル女史原著 西班牙人の西班牙	米國イリー氏原著 産業社會の進化
英國ウィーア氏原著 近世歐洲文化史論	英國エリウット氏原著 土耳其帝國	佛國ジョード氏原著 社會經濟學

トイ4T-22

<p>米國パーソン氏原著 恐慌論</p>	<p>米國セリグマン氏原著 租稅論</p>	<p>米國ステツオン女史原著 婦人と經濟</p>	<p>大日本文明協會編纂 日米交渉五十年史</p>	<p>佛國セーニヨホス氏原著 現代文明史</p>	<p>佛國セーニヨホス氏原著 歐洲現代政治史 二卷</p>	<p>佛國マクフアソン氏原著 政治的發展の一世紀</p>
<p>英國ウイリアム氏原著 十九世紀科學の進歩</p>	<p>米國ラテイマー女史原著 十九世紀末年史</p>	<p>佛國ボサンケー夫人原著 家族論</p>	<p>大日本文明協會編纂 近世名婦傳</p>	<p>佛國メチニコツフ氏原著 人生論</p>	<p>英國ウエルス氏原著 第二十世紀豫想論</p>	<p>大日本文明協會編纂 世界の宗教</p>
<p>米國モンロー氏原著 世界教育史要</p>	<p>英國レッキー氏原著 歐洲道德史 二卷</p>	<p>佛國ロリーエ氏原著 比較文學史</p>	<p>獨逸ステルネク氏原著 現代生活の新問題</p>	<p>米國フォグター氏原著 米國の對東外交</p>	<p>佛國ル・ボン氏原著 民族發展の心理</p>	<p>佛國ル・ボン氏原著 群衆心理</p>

終

